始

21
439

修養一ヶ年

宮内省圖書寮

修養一ヶ年

大正
5. 6. 21
内交

修養と幸福

大五
内文

序

○宋史に曰く、卷を開けば益あり、然り食物の肉体を養ふ如く、書を閲すれば精神に益する處甚だ多し、殊に修養の書に至つては更らに益する處深し。

○然れども書は見るを以て足れりとすべからず、食物を咀嚼せざれば胃の腑を傷ぶ如く、書も是れを讀んで味はざれば害無きまでも益する處あらず。

○書を讀むには宜しく愼重なるべし、就中人格修養の書を讀むには最も愼重なるべし、頓に多くを貪らんよりは僅かに誦して實行するに如かず、多讀多誦は遂に「論語讀みの論

「話知らず」の喩を殘さん。

○本書は此主趣によつて筆を執り、普く修養に志さん人々の爲めに備ふ、故に讀者は日々の其條をのみ自得し實行に努めて他日に互らざれ、他日に互らば通讀の弊に陷らん。

○題して一ヶ年と云ふと雖も一ヶ年を以て終りとする意味にあらず、卷末より更らに卷初の一月一日に反覆すべし、歳暦は新なりと雖も月日は反覆するものなればなり、若し夫れ本書に要なきに至らば修養既に足れりと云ふべし。

著者述

修養一ヶ年目次

【一月】

一日　木の長きを求むる者は必ず其根本を固くし、流れの遠きを欲する者は其源泉を浚くすべし

二日　君子の道は譬へば遠きに行くに必ず近きよりするが如く、高きに登るに卑きよりするが如し

三日　鐵は熱するにあたつて打て

四日　人に物云や油のしづく落ちてひろがる何處までも

五日　山に躓かずして垤に躓く

六日　疾膏肓に入る（世に盲と書くは誤り）

七日　櫻木をくだきてみれば花もなし

八日　花をば春のうちにもちけり

九日　鳧の脛短かしと雖も之を續かば則ち憂ひん

十日　百戰百勝は善の善なるものにあらず

十一日　青は藍より出でゝ藍よりも青く

十二日　冰は水より爲りて水よりも寒し

十三日　良藥は口に苦く諫言は耳に逆ふ

十四日　黄金重からず一飯重し

十五日　世に越えてあまりに人の親さはついには中の違はぬは無き

十六日　猿を檻中に置けば則ち豚と同じ

十七日　君と寢ふうか五千石取ろか、何んの五千石君と寢る

十八日　人の短を道ふ無れ已の長を説く無れ

君は舟臣は水

甑を墮して顧ず

十九日　身體髮膚父母に之を受く、敢て毀傷せざるは孝の始也、身を立て道を行ひ名を後世に揚げ以て父母を顯す孝の終り也

二十日　苛政は虎よりも猛し

二十一日　學を廢すること機を斷つが如し

二十二日　前事を忘れざるは後事の師なり

二十三日　他山の石以て玉を攻くべし

二十四日　亢龍悔あり

二十五日　匹夫罪なし、璧を懷いて罪あり

二十六日　善く戰ふ者は先づ勝つべからざるを爲して、以て敵の勝つべきを待つ

二十七日　君子は交絶てども惡聲を出さず

忠臣は國を去れども其名を潔くせず

二十八日　隴を得て復蜀を望む

二十九日　宋襄の仁

三十日　亡羊の嘆

三十一日　因果應報

【二　月】

一日　笑ふ門には福來る

二日　十目の視る所、十指の指す所、其れ嚴なるかな

三日　遁辭は窮する所を知る

四日　怒を遷さず過を貳せず

五日　左右を顧みて他を云ふ

六日　論より證據

七日　霜を踏んで堅氷至る

八日　斃ふるは學の半

九日　寧ろ鷄口となるとも牛尾になることなかれ

十日　業は勤むるに精しく、嬉むに荒む

十一日　天下生じ易き物ありと雖も一日之を曝めて十日之を寒さは未だ

十二日　能く生ずるものあらざるなり

十三日　木に緣つて魚を求む

十四日　過ぎたるは猶及ばざるが如し

十五日　二人心を同じくすれば其利金を斷つ

十六日　大義親を滅す

十七日　成事は說かず、遂事は諫めず、既往は咎めず

十八日　歲寒ふして然る後松柏の凋むに後るゝを知る

十九日　堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍

二十日　肉多しと雖も食氣に勝たしめず

二十一日　瓜田に履を納れず、李下に冠を整さず

二十二日　遼東の豕

草鞋切れても粗末にするな藁はお米の親ぢやもの

二十三日　井底の蛙

二十四日　二兎を追ふものは一兎を得ず

二十五日　嗟來の食（あゝ來り食へと人を鄙みて與ふる食物）

二十六日　備へるを一人に求むることなかれ

二十七日　病焚たり、子朝より退いて曰く人を傷めたりや、馬を問ふ

二十八日　智に過ぐれば嘘をつく

【三　月】

一日　業務を逐へ、業務に逐はるゝ勿れ

二日　始めは處女の如し、敵人戸を開く、後には脫兎の如し、敵拒ぐに及ばず

三日　窈窕たる淑女は君子の好逑

四日　一の快樂には千の苦痛伴ふ

五日　末の世は祈求むる其事の、驗無

六日　きこそ驗なりけり
七日　足るを知らば常に足る
　　江南の橘、江北に生して枳となる
八日　書は以て姓名を記すに足るのみ
　　劒は一人の敵、學ふに足らず萬人の敵を學ばん
九日　文臣錢を愛まず、武臣死を惜まずんば天下太平ならん
十日　和順は家を齊ふの本
十一日　業繁ければ功少し
十二日　臍を嚙む
十三日　殷鑑遠からず
十四日　巧言令色鮮し仁
十五日　怒は失敗の第一歩なり
十六日　うきよをば何んの絲爪と思ふなよ、ぶらりとしては暮されもせず
十七日　思慮無き人は常に談ず
十八日　過つては則ち改むるに憚ることなかれ
十九日　故さを溫れて新らしきを知る、以て師となるべし
二十日　人を恕して已を恕する勿れ
二十一日　燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや
二十二日　狡兎死して走狗煮られ、飛鳥盡きて良弓藏り、敵國破れて謀臣亡ぶ
二十三日　已の聰明に據ること勿れ
二十四日　學は君子たるを求むる所以
二十五日　百なりや夢一すじの心より
二十六日　寇に兵を藉し盜に糧を齎す
二十七日　機事密ならざれば則ち害成る
二十八日　鼎の輕重を問ふ
二十九日　暴虎馮河して死して悔なきものは吾れ與にせざるなり

三十日　名譽は鴻業の香氣なり
三十一日　大人は赤子の心を失はず

【四　月】

一日　長者に貧を語る勿れ
二日　若し藥瞑眩せざれば厥の疾瘳えず
三日　心に銘し骨に鏤む
四日　兵を養ふ千日なるも用は一朝にあり
五日　心に我慢ある時は愛嬌を失ふ
六日　朽木は雕すべからず、糞土の牆は杇すべからず
七日　之れ戒めよ之を戒めよ、爾に出づるものは爾に反るものなり
八日　主を重んじて法を畏るべし
九日　面白の酒宴や本心を失はぬほど
十日　蛟龍雲雨を得ば終に池中の物にあらず
十一日　惡魔も又聖書を引用す
十二日　天は萬物を平等に擁護す
十三日　背水の陣
十四日　誠は天の道なり
十五日　天に違ふ處は成ると雖も必ず敗る
十六日　牝雞は晨することなし、牝雞の晨するは惟れ家の索るなり
十七日　有德なる婦人は却て良人を左右す
十八日　駟馬の馴れざるは御者の過りなり
十九日　蝮蛇一たび手を螫せば壯士疾く腕を解く
二十日　大富は則ち驕り大貧は即ち憂ふ
二十一日　死生命あり富貴天にあり
二十二日　病に遇ふて健の寶なるを知る
二十三日　咽喉元過ぐれば暑さを忘れる

二十四日　名利の人、之を小人と云ふ
二十五日　一將功成つて萬骨枯る
二十六日　三度喰ふ、飯さへ強し柔らかし
　　思ふまゝにはならぬ世の中
二十七日　成功の秘訣は信用と努力にあり
二十八日　赤心を推して人の腹中に置く
二十九日　己れを抓つて人の痛さを知れ
三十日　成功とは精神の別名なり

【五　月】

一　日　人の一生は重荷を負ふて道をゆくが如し、いそぐべからず、不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ、勝つことばかり知りて負くる事を知らざれば害其身にいたる、おのれを責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるに勝れり

二　日　飽食暖衣、逸居して教なければ則ち禽獸に均し

三　日　田有れども耕さゞれば倉廩虛し

四　日　雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひん

五　日　風は蕭々として易水寒し、壯士一たび去つて復た還らず

六　日　木強ければ則ち折れ易く、革固ければ則ち裂く、齒は舌より堅くして之れに先ちて斃る

七　日　勤むれば則ち匱しからず

八　日　言悖つて出るものは亦悖つて入り、貨悖つて入るものは亦悖つて出づ

九　日　尺蠖の屈ずるは以て信びんことを求むるなり

十　日　先づ隗より始めよ

十一日　孺子教ふべし

十二日　靜を主とすれば動も吉なり
十三日　智者も常に智なること能はず
十四日　罪を天に得ば禱る所なし
十五日　身を樂しましめば心を苦しむ
十六日　借金は自由を化して奴隷となす
十七日　一狐裘三十年豚肩豆を掩はず
十八日　人は天より賜ふにあらざれば受くること能はず
十九日　今更らに何を惜まん大夫の、素より君に捧げぬる身は
二十日　おもしろの好色や身を亡さぬほど
二十一日　必要は發明の母なり
二十二日　何事もおづるな〳〵、おづれば仕損ふぞ、おづるは平生のこと場へ出てはおづるな〳〵、溝をばづんと飛べ、危ふしと思へばはまるぞ
二十三日　愚人の財を貪ぼること蛾の火に赴くが如し
二十四日　樂しみは貧しきにあり梅の花
二十五日　財囊の滿ちし女は鼻持がならぬ
二十六日　吾日に三たび我身を省み、人の爲めに謀りて忠ならざりしか、朋友と交りて信ならざりしか、傳へられて習はざりしか
二十七日　常に我身を省みて先づ我が過を知るべし、過を知りなば遠かに改むべし
二十八日　始めあらざることなく、克く終あること鮮し
二十九日　爾の榮に矜る勿れ、天道は盈つるを惡む
三十日　命の終る時は終る時に終るにあらず
三十一日　大金を貸せば敵をつくる

【六　月】

一日　一錢輕しと雖も是を積まば以て貧人をして富しむべし、一日短しとするも之れを累ぬれば以て一世を終るべし、世に寸陰を惜む人尠きは實に嘆すべし

二日　軒に巣を張りたる蜘蛛を地上に落せば足を收め石の如くなりて死を逃れんことを計る、彼は小智にして人を計らんとするなり少しなりとも走り逃るればての程も命存すべし、彼は人は知らじと思ふならんも、彼れの謀計は人よく知れり、無智の人、有智の人を計ること蜘蛛の謀計に同じ、笑ふべし

三日　自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本源

四日　羅馬は世界を征伏し、富は羅馬を征伏せり

五日　明日は成すべきことは今日是れを成すべし

六日　一人儉を知れば一家富み、王者儉を知れば天下富む

七日　學びて思はざれは則ち罔し、思ふて學ばざれば則ち殆し

八日　老いたりとも學び得ざるの理なし

九日　日々善を行つて休まず、小善と雖も廢せざれば一日十二時の功あり、一月三十日の功あり、一年三百六十六日の功あり、其積累の至り、高大測り知るべからず、須らく善を樂んで倦むこと勿るべし

十日　公道逆して私門塞り、公義立つて、私事息む

十一日　衣は新しきに如くはなく、人は故きに若くはなし

十二日　人を譽むるの言は太だ溢るべからず、人を責むるの言は太だ盡すべからず、一時意を暢べずとも後復悔心あり、含蓄の妙、知らざるべからず

十三日　蓬麻中に生ずれば扶けずして直し

十四日　世に處しては必ずしも功を邀めざれ、過なき是れ功なり

十五日　己れを知れ

十六日　名を爭ふ者は朝に於てし、利を爭ふものは市に於てす

十七日　天の將に大任を是人に降さんとするや必ず、先ず其心を苦め其筋骨を勞し、其體膚を飢やし、其身を空乏し、其爲す處ろ拂亂するは心を動かし、性を忍び、其よくせざるところを增益する所以なり

十八日　金と灰吹は溜るほど汚い

十九日　人心の同じからざる其面の如し

二十日　天は自ら助くる人を助く

二十一日　君子は己れを省みる

二十二日　小人窮すれば斯に濫す

二十三日　憂きことの猶此上に積れかし、限ある身の力ためさん

二十四日　最も困難なりしことは尤も記憶す

二十五日　涼しさに大福帳を枕かな

二十六日　道端の木槿は馬に喰はれけり

二十七日　己れ尊ぶものは萬人亦之れ尊ぶ

二十八日　人生意氣に感ず、功名誰れか論ぜん

二十九日　人事をつくして天命を俟つ
三十日　其源を塞ぐものは渇き、其本に背くものは枯る

【七　月】

一日　原泉滾々として晝夜を舍てず、科に盈ちて後に進み、四海に於る、本あるもの是の如し
二日　德孤ならず必ず隣あり
三日　人皆我が飢を知りて人の飢を知らず、故に人を憐むの心なし、我が飢を知らば何んぞ人を憐まざらん、放逸の人はたゞ我れを知りて人を知らず
四日　一寸の嘘は五尺の身體を縮む
五日　長く見ざれ、短く聞かざれ、怨は怨を以て消すべからず、怨は怨まざるを以て消ゆるものなり
六日　紳士には一の諷刺にて足れり、然れども野人は之を鞭撻せざれば悟らず
七日　天の星を數へるな
八日　嘉肴ありと雖も食はざれば其旨きを知らず、至道ありと雖も學ばされば其善きを知らず
九日　錦を衣て綱を倚ふ
十日　兵は拙にして速きを聞く、未だ巧みの久しきを聞かず
十一日　麒麟の衰ふるや駑馬是れに先つ
十二日　遠きを知りて近きを知らず
十三日　毛を以て馬を相す
十四日　管を以て天を闚ふ
十五日　羊をして狼に將たらしむ
十六日　大聲は里耳に入らず
十七日　桃李言はざれども自ら蹊をなす
十八日　大行は細謹を顧みず
十九日　千人の諾々は一士の諤々に過ぎず

二十日　猛虎は尺草に伏して藏ると雖も身を蔽ひ難し
二十一日　咆哮する者必ずしも勇ならず
二十二日　狗猛くして酒酸し
二十三日　驟雨は日を終へず
二十四日　耳を掩ふて鈴を盜む
二十五日　天下道有れば走馬却けて糞車に以てす
二十六日　五寸の鍵にして開闔の門を制す
二十七日　重きを負ひ遠きを涉れば地を擇ばずして休し、家貧しくして親老ゆれば祿を擇はずして仕ふ
二十八日　楚王弓を失ふて楚人之を得る
二十九日　毛を吹いて疵を求むる
三十日　號令汗の如し
三十一日　創業は易く守成は難し

【八　月】

一日　人を以て言を廢せず
二日　三人龜を證して鼈と作す
三日　子を思ふ心の道の心もて、親につかへよ世の中の人
四日　衆口金を鑠し、積毀骨を銷す
五日　剛毅木訥仁に近し
六日　魚水中にあつて其水なることを知らず
七日　慧智出でゝ大偽あり
八日　遠き慮りなければ近き憂あり
九日　王侯將相寧ろ種あらんや
十日　水滴りて石穿つ
十一日　香餌の下に必ず死魚あり
十二日　野人芹を献ず
十三日　呑舟の魚も水を失へば螻蟻に制せられる
十四日　足るを知るものは富む
十五日　不義の富貴は浮べる雲

十六日　錦を衣て夜行く
十七日　千金の子は堂に垂れず
十八日　馬疵れて毛長し
十九日　疵馬は鞭箠を畏れず
二十日　富貴となれば他人も合ひ、貧賤なれば親戚も離る
二十一日　男子當死中に活を求むべし
二十二日　患は蕭牆の間より起る
二十三日　虎を養ふて自ら患を遺す
二十四日　魚の釜中に遊ぶが如し
二十五日　滿は損を招き、謙は益をうく
二十六日　死灰復た燃えざらんや
二十七日　白刃胸に扞ふときは則ち目流矢を見ず戟を拔いて首に加へられんとする時は則ち十指を辞せず
二十八日　暴を以て暴に易ふ
二十九日　羮に懲りて虀を吹く（一に虀を膾と記したものもある）
三十日　月を指して指を認める
三十一日　蠶を拾ひ鰻を握る

【九月】

一日　鼠の器物を嚙むは器物を欲するあらず
二日　氷炭相容れず
三日　影は身を離れず
四日　蚊虻に牛羊を走らす
五日　先んずれば人を制し後れば人にせ制らる
六日　鳥起つ者は伏なり
七日　死地に陷りて然して後に生く
八日　蟷螂臂を怒らして車轍に當る
九日　窮寇は迫る勿れ
十日　大功を成す者は衆に謀らず
十一日　將に之れを奪はんと欲せば必ず固く之れを與ふ
十二日　與人與を成せば人の富貴を欲む

十三日　牛首を懸げて馬肉を賣る
十四日　三十六計走るを上計となす
十五日　大家將に顧らんとする一木の支ふる所に非ず
十六日　蔦は松柏に施ふ
十七日　冠履を貴びて頭足を忘る
十八日　耳を貴んで目を賤しむ
十九日　人常に菜根を咬み得ば、則ち百事做すべし
二十日　家雞を輕んじて野雉を愛る
二十一日　良驥の足を絆して責むるに千里の任を以てす
二十二日　淵に臨みて魚を羨むは退きて網を結ぶに如かず
二十三日　鬼の念佛
二十四日　名玉と雖も故なくして人に投ずれば人必ず怒る
二十五日　人間萬事塞翁が馬
二十六日　己れに克ちて禮に復るは仁と爲なり
二十七日　朝に道を聞いて夕に死すとも可なり
二十八日　善を積むの家には必らず餘慶あり、不善を積むの家には必ず餘殃あり
二十九日　隱れたるより顯るゝは莫し、君子は其獨を愼しむ
三十日　好事門を出でず、惡事千里を傳ふ

【十月】

一日　禍福門無し、唯だ人の召くところによる
二日　善を爲すに名に近づくなかれ、惡を爲すも刑に近づくなかれ
三日　成功の方法は必ずしも之を知るを要せず、能く一事を爲すべき

四日　を知りて全力を注げば足れり
五日　婦を教へるは初來にす
六日　十讀一寫に如かず
七日　己を釋きて人を教ふるは逆、己れを正して人を教ふるは順、足容は重、手容は恭、目容は端口容は止、聲容は靜、頭容は直氣容は肅、立容は德、色容は莊
八日　虎は死して皮を止め、人は死して名を殘す
九日　何人も其希望を悉く滿足せしむるを得ず
十日　美人黃土となる、況んや乃ち粉黛の假をや
十一日　仁に過ぐれば弱くなる、義に過ぐれば固くなる、禮に過ぐれば諂ひとなる、智に過ぐれば噓をつく、信に過ぐれば損をする、氣長く心穩やかにして萬に儉約を用ひて金を備ふべし、儉約の仕方は不自由なるを忍ぶにあり
十二日　此世に客に來たと思へば何んの苦もなし、朝夕の食うまからずともほめて食ふべし、元來客の身なれば好嫌は申されまじ、今日の行ひおはり、子孫によく挨拶してしやばの御暇申すべし
十三日　寡欲にして後に欲多きを知り、過ちを改めて後、過あるを知る
十四日　疾無きものは醫者を求めず
君の爲めに身をすつるを忠と云ふ、親の心に脊かずしてつかふるを孝といふ、老たるを敬ひ、士卒を撫育し、國民を憐れむを仁と云ふ、一度諾して變ぜず、終始全きを義といふ、謙退辭讓

を禮といふ、謀略を帷幕の中にめぐらし、勝つことを千里の外に施すを智といふ、かりにも虛言を構へず、信を失ふべからず
十五日　遠き慮り無き時は近き憂あるべし、萬事に恐ひず屈せず、過つて改むるに憚ることなかれ、邪
十六日　曲輕薄の人と交るべからず、大酒は失多し、色情は身を失ふ、
十七日　心ひがむは嫉妬偏執の深きなり
十八日　儉約を專とし驕りを愼しみ、人の非を見て我身の行ひを正すべし、我愚なるが故に譬書して箴となすのみ
十九日　正直の頭に神宿る
二十日　今の教ふる者は佔畢を伸す
二十一日　疾行には善迹なし
二十二日　險語鬼膽を破る
二十三日　吉事には左を尙び、凶事には右を尙ふ
二十四日　履新らしと雖も冠となさず
二十五日　眞は立つが如く、行は行が如く
二十六日　草は走るが如し
二十七日　人を繪くものは其情を繪く能はず
二十八日　善游ぐものは溺る
二十九日　四重と四輕
三十日　口尙ほ乳臭し
百禮の會、酒あらざれば行はれず
飢えたるものは食を爲し易く渴するものは飲を爲し易し
大履成りて燕雀相賀す
崑山の下には玉を以て鳥を抵つ
烏に反哺の孝あり、鳩に三枝の禮あり

三十一日　病は小癒に加はる

【十一月】

一日　尊客の前に狗を叱せず
二日　人事棺を蓋ふて定まる
三日　人は萬物の靈
四日　大道廢れて仁義あり
五日　生年百に滿たず、千歳の憂を思ふ
六日　巧僞は拙誠に如かず
七日　泳猴にして冠す
八日　父母の根元は天地の命令にあり
　　身體の根元は父母の生育にあり
　　子孫の相續は夫婦の丹精にあり
　　父母の富貴は祖先の勤功にあり
　　吾身の富貴は自己の勤勞にあり
　　身命の長養は衣食住の三にあり
　　衣食住の三は田畑山林にあり、
　　田畑山林は人民の勤耕にあり、
　　今年の衣食住は昨年の產業にあり、來年の衣食住は今年の艱難にあり、年々歳々報德を忘るべからず
九日　白栴檀馥らざるにあらざれども焉んで能く風に逆らはん
十日　人其子の惡きを知ることなく、其苗の碩なるを知ることなし
十一日　名は實の賓
十二日　名實當る無し
十三日　梁上の君子
十四日　人木石にあらず
十五日　命は義によつて輕し
十六日　股を割きて腹に啖はしむ
十七日　獸を得て人を失ふ
十八日　之を道くに政を以てし、之を齊ふるに刑を以てすれば民免れて恥なし、之れを道くに德を以て

し、之を齊ふるに禮を以てすれば恥あつて且つ格る
十九日　母に取り入らんとすれば先づ娘に賄へ
二十日　月かげのいたらぬ里はなけれども、ながむる人のこゝろにぞすむ
二十一日　百金は貯ふべしと雖も一金を貯ふるは難し
二十二日　心誠に之を求めば、中らずと雖も遠からず
二十三日　誰れか烏の雌雄を知らん
二十四日　雀虎の口に入る
二十五日　不用の物を買ふ時は有用の物を賣らざるべからず
二十六日　須らく人情の常なるを知るべし
　　方に人を料理し得
二十七日　仁者は難きを先にし、獲ることを後にす
二十八日　喜來る時一點檢し、怒來る時一點檢し、怠惰の時一點檢し、放肆の時一點檢す、是れ省察の大條欵なり
二十九日　德行は香氣の如し、是れを碎けば益々芳し
三十日　立志の功、耻を知るを以て要となす

【十二月】

一日　身忙がしければ心を靜かに持て
二日　一犬形に吠ゆれば百犬聲に吠え
　　一人虛を傳ふれば萬人實を傳ふ
三日　衣食足つて禮節を知る
四日　人は自己の身を以て第一の幇手と爲すべし
五日　尺も短かき處あり、寸も長き處あり

六日　心は逸すべく形は勞せざるべからず

七日　儉より奢に入るは易く、奢より儉に入るは難し

八日　沃度の民は材ならず、淫すればなり瘠土の民は義に嚮はざることなし、勞すればなり

九日　石中に火あり、打たざれば出でず、人中に佛性あり、修せずんば顯はれず

十日　底ひなき淵やは騒ぐ山川の淺き瀨にこそ仇浪は立て

十一日　名聞の心存すれば至らざるなり

十二日　千早ふる神の心も月なれや、詣る心の内に映らふ

十三日　見聞は多きより存し、言語は稀なるを欲す

十四日　鹿をさして馬と云ふ

十五日　理想は遠きにあらず先づ手近より始むべし

十六日　世の中を渡りくらべて今ぞ知る阿波の鳴門に波風もなし

十七日　智者には一言にて足る

十八日　七縱七橫

十九日　才は宜しく大なれ、小才は人に服せられ大才はよく人を服す

二十日　罪を懺悔すれば心輕し

二十一日　落花枝に上り難く、破鏡重れて照さず

二十二日　皆人の心の本はます鏡、みがゝざればいかでくもりはつべき

二十三日　人事に潮汐あり、其滿潮に乘すれば幸運に達す

二十四日　苦しい時の神頼み

二十五日　疑はしきことあらば之れを問ふて耻づべからず、過ちたる事あらば之れを正さるゝを耻づべからず

二十六日　一苦一樂相磨練し、練極まりて福を成すものは其福始めて久し

二十七日　不用のものは一厘にても價高し

二十八日　厭世は人を弱きに導き、樂天は人を力に導く

二十九日　日中すれば則ち移り、月滿つれば則ち虧け、物盛んなれば則ち衰ふ

三十日　一葉の落つるを見て將に暮れんとするを知り、瓶中の水を見て天下の寒きを知る

三十一日　始あるものは必ず終あり

修養一ケ年目次終

修養一ケ年

岡田文祥堂編輯部著

一月一日

■木の長さを求むる者は必ず其根本を固くし、流れの遠きを欲する者は其源泉を浚くすべし……（貞觀政要）

事の起るのは起る時に起るのでは無く、起るべき因があつて初めて起るものである、因を定めずして結果のみを求めやうとするのは針の無い糸を垂れて魚を釣らふとするやうなもので其愚や笑ふべきであるが、世には隨分虫のよい考へ

を以て此の愚を學ばふこするものがある、其愚や更らに笑ふべく、而して笑ふ者は他山の石、以て大いに愼しむべきである。

一月二日

■君子の道は譬へば遠きに行くに必ず近きよりするが如く、高きに登るに卑きよりするが如し……（中庸）

獨り君子の道だけでは無い、世上凡てのことは必ず順序を蹂まねばならぬ、急いで駈ければ轉ぶ恐れがある、慌てゝ飛び付ふこすれば踏み外さぬこも云へない「急げば廻れ瀨田の唐橋」で、急ぐからこ云ふて危ふい近道をこるよりは少く々遠廻りであらふこも安全な正道を行く方が大丈夫である。

一月三日

■鉄は熱するにあたつて打て……（西諺）

鐵を細工するのに、鞴にかけて熱した時に打つて行ふが、冷めては中々意の通りになるものでは無い、機會も夫れこ同じことで、乘ずべき時に乘せねば思惑通り成し遂げ得られぬものである、

一月四日

■人に物云や油のしづく落ちてひろがる何處までも……（俗里）

殊に擴がり易いのは他人の秘密や惡口である、何氣無くウツカリ口外した後で「アツ失策た、彼れは云ふのじや無かつた」こ頭を搔いて見たこころで最早後の祭りで遲い、論語に「駟も舌に及ばす」一旦口外したこは四頭立の馬車で追つかけた處で取り返すこが出來無いこ云ふておる、尤も其頃は駟即ち四頭立の馬車が連力の最も早いものであつたから駟こ云ふたが、現今なれば自働車も及ばすこ云ふたに違ひは無い、兎角口は禍の門、古諺にも「口こ財布は閉ずるに利あり」こ戒しめてある、言葉は用さへ足りれば夫れでよいベラ〳〵こつまらぬこを諜言つて居る内にはトンデも無いこが出て後悔をせねばならぬこ

こが起る。

一月五日

■山に躓かずして垤に躓く……（淮南子）

昔から山に躓いて轉んだと云ふものは無いが、垤や小石に躓いて轉んだゞけなればまだしも、御念の入つたのになると脛や腕へ擦過傷を拵へたり、足の骨を挫いて整骨師の厄介になつたと云ふやうな例か尠く無い、堂々たる大の男が僅か爪先ばかしのものに躓づいてさまで酷い目に逢ふと云ふのは可捺しいやうだが、約まり相手を侮つて油斷をするから起ることだ、山は大きいものだから誰れだつて氣をつける、けれども垤や小石のやうなものはテンで眼中においてはおらぬからツイ失策をやることゝなる「大敵と見て恐るゝな、小敵と見て侮るな」と云ふのは晉に兵家の心得おくべき語では無い、大なる失策は反つて小さなものから起るものである、俗に「油斷大敵」と云ふことがある、是れなんか

も此語と共に千古不滅の格言と思へば何事につけても間違ひの無いものである

一月六日

■疾膏肓に入る（世に盲と書くは誤り）……（左氏傳）

既に時機を失して恢復の見込の無いことである、此の語の起りは晉の景公が病氣に罹つて容態が日々に重くなつたので奉の國から緩と云ふ名醫を乎び迎へることゝなつた、處が或日景公の夢に病が二人の子供となつて現れ「今處秦から來る緩と云ふ醫者は中々名醫だそうなが、そんな醫者が來られては我れ〳〵は安閑として居られまい、何うしやう」と其一人が云ふと相手の一人は「さあ困つた、それでは寧そ肓の上、膏の下へ逃れたら何うだ、其他に逃れ塲所はあるまい」と語り合つた。

景公は不思議に思ひながらも只管緩の來るのを待つて居る内に日ならず緩が來た、そこで早速診察をして貰ふと緩は稍暫らく小首を捻つて「恐れながら是れ

は何うも不可ません、何うやら病氣が肓膏に入つて居るやうで御座いますが、病も肓膏へ入つては最早手の付けやうも御座いません、殘念ながら手遲れに成りました」と云ふたので景公も夢に見た事と同じ見立に感心して緩の勞を犒ひ厚く待遇して秦へ歸らしたと云ふことである。

一月七日

▣櫻木をくだきてみれば花もなし、花をば春のうちにもちけり……（古歌）

物事には時機のあるものだ、時機を待たずして慌てゝ望めば反つて何物も得ることは出事無い、或人が「櫻は立派な花の咲く樹だ、彼れほどの花を咲くことして見ると幹の中には何うせ澤山な花があるだらふ、一應幹を割つて見てやらふ」と云ふので常々大切にして居る櫻の樹の幹を斧で二つに割つて見たが元より花のハの字もあるべき筈は無いから「チエッ、失策たことをした、是れなれば

氣長く咲く時季を待てばよかつた」と悔んだと云ふ笑ひ話があるが、是れは決して笑ひ話として聞き流すべきでは無い、世には氣の焦氣る爲めに、切角成功しやうとする事業を、中途で打ち壞して仕舞ふものの澤山あるのと同し譯だ、然も中には中途ごころか今一二歩と云ふ處で遣り損ふものも尠くは無い、學生なんかの内にも今一年か二年と云ふ處で他校に轉ずるのなればまだしも、つまらぬ空想にかゝりて退學するものも此の例に外ならぬ。

一月八日

▣鳧の脛短かしと雖も之を續かば則ち憂ひん……（莊子）

莊子には「長なる者、餘ありとなせず、短なるもの足らずとせず、是の故に鳧の脛短かしと雖も之を續かば則ち憂ひん、鶴の脛長しと雖も之を斷たば則ち悲まん、故に性の長きは斷つべきにあらず、性の短かきは續ぐべきにあらず、憂を去る所無き也」とある、如何にも其通りで、人には持つて生れた本分もあれ

ば性質もある、是れを脇から絶て折り撓めやうこした處で意の通りになるものでは無く、反つて當の本人の迷惑こなるものである。

一月九日

■百戰百勝は善の善なるものにあらず……（孫　子）

戰爭は國こ國こが何方も自國の意志を紳張しやうこ云ふ處から起るもので、啻に敵の將卒を殺し、戰鬪力を無くするを以て目的こするのでは無い、約まる處は相手を屈服さして我が思ふ通りになりさへすればよいのだ、さすれば別に戰はなくこも、所謂平和主義によつて解決が出來れば是れに上越すこは無い譯である、そこで莊子には此の句の次ぎへ「戰はずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」こ附け加へて居る。

一月十日

■青は藍より出でゝ藍よりも青く、氷は水より爲りて水よりも寒し……（孫　子）

青色の元は藍から出來たものであるけれども、其色は原料の藍よりも青い、また氷は水から出來たものであるけれども、其冷やかさは水ごころの比では無い、學問だつて青の色や氷こ同樣で油斷なく勉強さへすれば敎へて貰つた敎師を凌いで飛び抜けるここは何んでも無いこの譬へであるが、世には此の語から取つて能く出來る學生を賞めるのに「青藍の譽あり」こ云ふておる。

一月十一日

■良藥は口に苦く諫言は耳に逆ふ……（孔子家語）

是れは有名な格言である、孔子は孔子家語の六本編に此の格言を擧げて「湯武は諤々を以て昌に、桀紂は唯々を以て亡ぶ、君に爭臣無く父に爭子無く兄に爭弟無く士に爭友無くして其過無き者は未だ之れ有らざる也」こ云ふておるが諤々は直言のこと、爭子は爭鬪の意味で無く事の利害を論ずるここである、如何

にも其通りで古來名を出したほどの人の事蹟を辿つて見ると必ず其背後には所謂諤々の言をなしたものがある、彼の源義家對大江匡房の故事なぞは此の最も判り易い例だ、匡房が義家のことを「義家公は立流な方だが惜いことには兵法を知らぬ」と臆面も無く云ふたのは取りも直さず諤々の言で、義家は夫れを聞いて「やッ、如何にも違ひは無い、匡房はよく云ふてくれた、俺れは兵法を知らぬから是非習へを受けねばならぬ」と悅んで匡房を師としたから後三年の役に「飛雁行の乱るゝを見て野に伏兵あるを知る」と教へられた語句によつて敵の計略の裏を掻き奇勝を得ることを出來たのは誰れも知る處である、是れを普通の者に取つては約まるところ持つべきものは直言の友である、自分の言葉に誰々諾々と從はぬ友である、また自分は其直言を用いて一から十まで從はぬにしろ其言ふ處を悅んで深く味はふ心掛を持つておらねばならぬ。

一月十二日

■黃金重からず一飯重し……（古　諺）

黃金の貴いのは價値があるから貴いのだ、是れを云ひ代へれば、其價値を以て我が望みのものを心のまゝに得ることが出來るから貴いのだ、若し百萬圓千萬圓の黃金を以てしても一飯の食とすら易へることが出來ぬやうだつたら黃金は少しも貴くは無い、一飯と云へば何んでも無いやうだが夫れでも生命をつなぐ大切な種である、黃金は如何に價値があらふとも生命の種として喰ふことは出來無い。

一月十三日

■世に越えてあまりに人の親きは、ついには中の違はぬは無き……（北條時賴）

親友は無くてはならぬ、だか親友だからと云ふて禮儀を崩さぬやうにするのは大切である、滿つれば欠くるなどと云ふ諺では無いが、餘りに親しくなり過ぎ

てはツイ〳〵惡口も出る、それも氣色のよい時には何んの事は無くとも一寸虫に觸るやうなことになつては取返しがつかない、夫れが源因となつて両者の間に檣壁が出來る、一方に變な工合になれば此方も心がよくないから次第に遠かつて、遂は今までの親友は反對に仇敵のやうになるものだから、親友として人も羨むばかりに入懇にするのはよいが如何に兄弟のやうな間柄であらふとも禮儀だけは保たねばならぬ。

一月十四日

■猿を檻中に置けば則ち豚と同じ……（韓非子）

猿は山中に駈け廻り、如何なる高木も平氣で擧じるほゞのものだが、それを蟻の中へ入れておいては鈍物の豚と同樣で其得意の木登りもすることは出來無い、人間たつて其通りで誰れでも物事に得手不得手のあるものだが夫れを適所に置いて事務に就かしめてこそ充分の腕を伸すことは出來れ、不得手の事を持ち

付けては猿を檻の中へ入れておくのと何の變つたことも無い、約まり人を使ふには其性質を見て得意の方面へ就かしめよと云ふ格言である。

一月十五日

■君と寢ようか五千石取ろか、何んの五千石君と寢る…（俗　諺）

古來から云て傳へられて居る有名な俗諺である、文學の上から辿ると聊か卑猥のやうに聞ゐるが併し人間は是れほゞの意氣が無くてはならぬ、黄白の爲めに眼晦み切角の決心を左右せられるやうでは到底大事を成すことが出來無い、詩經に「我心石に匪ず轉すべからず、我心席に匪ず卷べからず」とあるのも意味に於ては變りは無い、何事でも一旦斯ふと思ひ定めたことは能く誘惑に打ち克ち徹頭徹尾是れを貫く意志を忘れぬやうにすることは最も大切である。

一月十六日

■人の短を道ふ無れ己の長を說く無れ……（文　選）

此の語に次いで「人に施して愼んで念ふ勿れ、施を受けては愼んで忘る勿れ」こある、また戰國策には「唐蒙信浚君に謂て曰く、人の我れに德有る忘るべからず、我れの人に德有る忘れざるべからず」こ。

一月十七日

■君は舟臣は水……（荀　子）

荀子の王制編に「君は舟なり庶人は水なり、水は即ち舟を載せ、則ち舟を覆へす」こある、如何にも其通りで忠君愛國の念を以て君を戴き一國の隆盛發展を計るのは臣として行ふべき道であるが、併しまた國家の禍根を蒔くのも矢ッ張り臣であるこ云ふ警へをひいたものである。

一月十八日

■甑を墮して顧ず……（孝言故事）

物事は思ひ切りが肝腎である、昔後漢に孟敏こ云ふ人があつた、或日甑を荷ふて來かゝつたが何うした拍子か地に墮して木ッ葉微塵に破れて仕舞つたから其飲げでも拾ふであらふこ思ひの外、見向もせずにサッサこ行き過ぎやうこする樣子に折柄通り掛つた郭林宗こ云ふ人餘りのことに思ふて「おい孟敏一寸待て汝は思ひ切りのよいのも程があるぢや無いか、是れほどのものを破つて惜しいことは無いのか」こ言葉を掛けるこ孟敏はニッコこ笑つて「なに、惜しいこ云ふた處で仕方が無いぢや無いか、破れたものを今更ら何うした處で元の通りになるまい」こ云ふたまゝサッサこ行つて仕舞つたこ云ふ故事から此語が出たのである。

一月十九日

■身体髮膚父母に之を受く、敢て毀傷せざるは孝の始也、身を立て道を行ひ名を後世に揚げ以て父母を顯す孝の終り也

父母に孝を盡すの道はいろ〳〵こあるが、其根本こもすべき處は父母に安心を

させることゝ其心を悦ばし慰めることの二事である、處が安心をさせるには何うしたらばよいかと云ふに、燒野の雉子夜の鶴、禽獸ですら子を思ふ心の切なるものだ、樣々と他に心の痛める事があつても其内で始終心の底を離れぬのは我子の身の上である、何事にまれ我子には宜かれ、外出の時には何うか其身体が無事で居つてくれ、怪我誤ちは無いやうにこの一念であるから、子としては自分の一身を大切にし、日々無事な有樣を父母に見せたなれば是れほど安心をすることは無い。親の子を思ふのは夫れほどである、子が只だ無事な顏を見てすら安心をするものであるから、其子が生長の後、立派に立身出世をして我名を現はし家名を揚げるやうになれば何れほど悦ぶかも知れ無い。

一月二十日

■苛政は虎よりも猛し……（禮記）

虎は猛獸中の猛獸で人を見れば立所に屠つて仕舞はねばおかぬものであるが、

苛政は人民を苦しめるにした處で、人の生命を斷つのは虎ほども激しいことは無い、それに何故虎よりも猛しと云ふたかと云ふと此んな話がある。孔子が或日旅をした途中でフイと見ると一人の婦人が墓場で頻りと泣いて居る樣子の只ならぬので、歩みを止めて其譯を聞いて見ると、婦人は僅かに涙を拭ふて「妾は何んと云ふ薄命者で御座いませう、何をお隱し致しませう、實は妾の父が虎に喰て殺され、續いて夫も、また妾しの子までも同じやうに虎の爲めに生命を失ひましたから斯樣に泣いて居ります」と云ふ言葉に孔子は驚いて「そりや氣の毒ぢや、併し左程の虎が居るのを知りながら何故此んな土地に住んで居る、もつと安全な土地へ何故移轉ないのか」と云ふと「でも此地の大守は大變によいお方で、他所のやうに人民を苦しめるやうなことは御座いませんから」と云ふのを聞いて孔子は深く感に入り、附き添ふた門弟に向ひ「何うぢや、其方等もよく聞いておけよ、苛政は虎よりも猛きものであるぞよ」と云はれたのが此の

語の始めである。

一月二十一日

▣學を廢すること機を斷つが如し……（古　諺）

孟子は先生の宅で書物を習つて歸つてくるこ、孟子のお母さんは其姿を見て「コレ〳〵孟子、近頃は何うぢや、讀み書きの業も大分進んだであらふな」こ聞く言葉に、孟子は何氣無く「ナニお母さま、別段に變つたこことは御座いません毎日同しやうなこことを敎へて貰つて居ります」こ答へた、或は當時の孟子は餘り學問が好かなんだのかも知れない、するこお母さんは忽ら氣色を變へて「毎日先生のお敎へをうけながら別段に變らぬこは何んこ云ふこことを云ひなさる、それこ云ふのも畢竟するに其方の勉强が足らぬからである、今が大切な折柄であるのに何故怠けなさるか」こ庖丁を手に執つて折柄織りかけて居つた機の布を中途からプツリこ斷つて仕舞ひ「今其方が學問を怠つては恰こ此の布のやう

なものである、布も一反になつてこそ費ひ途はあるが、中途半端で切つて仕舞つては着物にすることが出來ますか」こ叱り付けたので孟子は大變に恐れ入り其後は一生懸命こなつて勵んだ功が空しからず遂に儒者こして大名をあげるに至つたのである。

一月二十二日

▣前事を忘れざるは後事の師なり……（史　記）

何事も必ず繰り返すものである、事に臨んで前の失敗を深く心にこめておけば再び失敗を見る心配が無い、尤も是れは强ち自分たけのこことでは無く、上古に溯つて其例を照らせこ云ふこことだ、說苑に「前車の覆へるは以て後車の戒こ爲すべし」こ云ふ語がある、俗に云ふ「人の振見て我が振直せ」で何事も後先を考へねばならぬ。

一月二十三日

■他山の石以て玉を攻くべし……（詩　記）

前の語と趣と異にして居るが意味に於てはよく似て居る。

玉は美なるもの、石は醜きものであるが、玉は石で磨いて其美なる特質を愈よ發揮することが出來る、世に惡人の末路を見て修養の種ともなれば、醜なるものを見て我が振を直すことも出來る。

一月二十四日

■亢龍悔あり……（易　經）

亢は極まるの意味である、龍は天に昇るものと傳へられて居るから亢龍は即ち天上した龍と云ふことになる。處が天上すべきものが天上して仕舞へば望みを遂げたのだから最早よいやうなものゝ是れから何うすることも出來無い、いや何うすることろか油斷をすれば落ちる憂があるから大變だ、反つて上り切らぬ内の方が前途に多大の樂しみがある、それればかりか上り切ると自然に慢心が出

る、自負心が起る、其結果は轉かり落ちることゝなるから安心をする時は無い

一月二十五日

■匹夫罪なし、璧を懷いて罪あり……（左氏傳）

昔から貧乏人の家へ泥棒の這入つた例は無い、是れ泥棒の目的が人を脅かそうとするのでは無く金品が欲しいからである、其目的物を手に入れる爲めには手段は撰ぶ處では無い、時によれば殺人もする、家も燒く、隨分と慘酷なことも する、即ち他人の金品を見てムラ〳〵と惡心を起すものであるから包み切れぬほどの餘財、云ひ換へれば身分不相應なものを持つて居れば災禍の種になると云ふ意味である。

一月二十六日

■善く戰ふ者は先づ勝つべからざるを爲して、以て敵の勝つべきを待つ……（孫　子）

是れは獨り戰爭だけでは無い、何事でも敵に勝ち相手を凌がふこするには血氣に逸つてはなら無い、敵の押し寄せるに任して守るこを第一こするに限る。

一月二十七日

■君子は交絶てども惡聲を出さず、忠臣は國を去れども其名を潔くせず……（文章軌範）

人は友人こ仲違ひをするこ、他のものに向つて「何うも彼んな奴は仕方が無い彼奴は此んな不德なここもやつた、また怪しからぬ非行もした」なぞこ相手の者の惡口を云ひたがる、また主家から暇を出された奉公人は「彼んな主人は仕方が無い、人を使ふここを知らぬ主人だ、彼んな家に辛抱が出來ぬから暇を取つた」なんかこ我が身を飾る爲めに人を讒りたかるものだが是れは甚だ宜しく無い此んなここをすれば反つて自分の信用を傷けるここゝなるから心得ねばならぬ。

一月二十八日

■隴を得て復蜀を望む……（十八史略）

慾には際限の無いものだが、人は足るここを知らねばならぬ、此の語は隴の大守の隗囂こ云ふものが反いたので光武帝には征討の軍を起して其領地を取つて仕舞つたが、隴の地續きに蜀こ云ふ國があるので「事の序だ、蜀も欲しくなつたから寧のここに取つて仕舞へ」こ終に蜀も我が手に入れて仕舞つた故事によつたのである。一に此の後に「隴を得て燭を望む」こ書くものはあるけれこも是れは誤りである。

一月二十九日

■宋襄の仁……（十八史略）

宋の襄公が楚に攻め寄せるこ、楚の方では大いに慌てゝ陳形を作るごころか水を渉つてワッ〳〵こ立ち騒いで居る樣子に、襄公の例に居つた一人「今の内に

早くお討ちなさい」と云ふと襄公は「いや」と顔振を振つて「君子は人の窮地に居るのを目がけて困らせるものでは無い」と云ふて楚の軍備へするのを待ちて軍を進めて戰つたがトーく大負をしたから、つまらぬ情をすることを世に宋襄の仁と云ふことになつた。

一月三十日

■亡羊の嘆……（列　子）

或牧羊者が一疋の羊を失つたから大騒きをやつた果は家人の者は元より、隣家の誰れ彼れにも賴んで探そうと云ふので揚子の家へもやつて來て「實は羊の行方を探そうと思ふのですが、人手が足ませんから誠に願ひかねますけれども何うか下男の方を拜借願ひたい」とのことに「宜しい、夫れではお伴れなさい」と快く諾つて下男を貸すことになつたから、牧羊者も大いに悅んで一同の面々を八方に走らせて探ねさせると、其日の夕刻一同の面々は疲れ果て立ち歸つた

樣子に揚子は牧羊者に向つて「何うです、在りましたか」「ハイ、有り難ふ御座います、何うも判りません」「ナニ、判らん、そりや妙だ、僅か一疋の羊を探すのに澤山な人がかゝつて判らんとは一体何うしたものです」と聞くとさア夫れがで御座います、一本道なれば無論判るも判らんも無いのですが何分にも岐路にまた岐路があるものですから何うも迷ふて了つて方向が判りませず、殘念ながら立ち歸つたそうで御座います」と云ふた話から出た語で、是れは物事が八方へ迷ふては一も得る處が無いと云ふ譬である。

一月三十一日

■因果應報……（佛　語）

善に善報あり惡に惡果ありと云ふ佛語から出た語である、何事でも善惡に抱はらず他人に對して仕向けた事は廻り廻つて何時か必ず自分の身に戻つてくる、早い理屈は物品を買ふのに其場で代金を拂はず仮令懸買に買て求めた處で月末

くれば拂はなければならないが、夫れと反對に懸賞に此方から賣つて居れば其場で代金を貰はなくとも月末に貰へる、それでも呉れぬ時には裁判所へ訴へてゝも貰ふべき權利がある、けれども買はぬものゝ代金を取りに來たところで何んな金滿家だつて素直に拂ふものも無ければ如何に慾張りの商賣人でも丸切り知らぬ家へ賣りもせぬ品物の代金を取りに行くものは無い。

二月 一日

■笑ふ門には福來る……（俚　諺）

此の福の字は金品を意味したものでは無く、俗にシアワセ、即ち幸ひのことである、處で笑へば何故幸福かと云ふと人世最大の樂みは一家の平和にある、世には澤山な財産を積んで夫婦喧嘩や親子の爭論絶間の無い家があるが此んな家は主人も家内も決して樂しく日を送つては居ら無い、表面では何不自由なく至極結構に見ゐても心の内では何日も煩悶して居る、夫れに引代ゐ、仮令財産は

無くとも家内一同は睦まじく和氣藹々として何日も笑聲の洩れる方が何れ程樂しみが深いか主人初め家族の幸福が判らぬ、昔から有名な句に「樂しみは夕顔棚の下涼み」是れなんかは全く眞情を穿つたものだ。

二月 二日

■十目の視る所、十指の指す所、其れ嚴なるかな……（大　學）

人の目は鋭いものである、人は氣が付かぬからと云ふので何事でも誤魔化そうとしても直樣化の皮が現はれるものだ、鑛金の金時計は何日までも金色では居るものでは無い、所謂十目の視る所で何日かは見現はされる、十人〻〻〻と云ふよりも此の十目、十指は多數の人と云ふ意味であるが、正眞正銘に價値のあるものは如何はご多數の人が見た處で動か無いけれども、誤魔化しものは必ず判る人の目は中々嚴しくて正直であるから少しも不正なことをしては不可ない。

二月 三日

■遁辞は窮する所を知る……（孟　子）

遁辞とは俗に云ふ逃げ口上のことである、逃げ口上、モ一つ言ひ變れは其場逃れの言葉は其人の人格が判る、心の卑劣しいことが見え透くものであるから決して云ふべきものでは無い。

二月　四日

■怒を遷さず過を貳せず……（論　語）

怒を遷さずとは俗に云ふ八ツ當りで、學生が教師から八釜しく言はれて理屈が返せぬものだから自分の家へ歸ると下男や下女に無茶苦茶に怒り散す、主人は外で何か凹まされて歸ると何んでも無いことに角を立てゝ妻君に當る、妻君は主人に言葉が返せぬものだから出入の者や雇人へ譯も無くボンつくなぞは所謂怒を遷すもので遷されたものこそ迷惑至極な話である。

二月　五日

■左古を顧みて他を云ふ……（孟　子）

此の後の出所に就いて面白い話がある、齊の宣王は隨分と我身勝手な性であつたから、或時孟子は其御前へ出ていろ〳〵と話の末「恐れながらお伺ひを致しますが、或者が楚の國へ遊びに參りますに就て其留守中に家内や子供を友人に賴んで出立致しましたが、其後程經て歸つて見ますと友人に賴んでおいた妻子は衣食に窮して非常に困難をして居りましたと仮に致しまして、若し陛下が其者であらせられましたならば何んと遊ばされます」とお尋ねをすると宣王は「そりや賴み甲斐の無い怪しからぬ友人ぢや、若し朕なれば云ふ迄も無い直樣交を絶つて仕舞ふぞ」「御道理で御座います、それなれば今一つお伺しを致しますが、一人の上役人が御座いまして、其役人が部下の者を意のまゝに使ふことが出來ませぬやうで御座いましたなれば何んと遊ばされます」「そんなものは下々を治める技能が無いのだから直樣役目を取り上げるぞ」と茲まではよかつた

が孟子は軈て一膝を進めて「恐れながら今一つお尋ねか御座います」「何事ぢや申して見よ其方の尋ねるだけのことは何んなりとも返答致して見せるぞ」「有りがたふ御座います、處で今一つお尋ね致したいのは餘の儀では御座いません、尤も左樣の儀は萬々あるべき筈は御座いますまいなれども、萬一陛下のお國が治まりませぬ時は如何になさいます」と云ふと今まで元氣よく返答をして居られた宣王は「ウムミミミ」と詰つて左右の近臣を見返り、こんでも無い話を仕かけて孟子の方には目もくれなんだ。

是れは宣王ばかりでは無い、世には隨分と此んな勝手な眞似をして人の笑ひを受け遂には爪彈きをせられる人間がある。

二月六日

■論語より証據……（俚諺）

何事でも理屈よりも實際が肝腎だ、口で如何ほど怜悧そうなことを云ふて居つ

ても事實に於て出來なければ三文の價値も無い、今一つ俚諺に畑水練と云ふ語がある、此の語も同じやうな意味で水に泳いだことの無い人間が、水に泳ぐ方法を誠しやかに口先で說いて居つても、さて實際に望んで水に飛び込んで見るとなると泳ぎごころが、顏すら水面に出すことが出來ないで遂には溺れ死ねばならぬやうな破目に陷る。

二月七日

■霜を踏んで堅氷至る……（易經）

霜と云へばホンの僅かに地上に布くもので朝日が是れを照らしても忽ち溶けて仕舞ふほどのものであろが、是れでも踏み固めたなれば遂には堅い氷となる、だから物はホンの聊かと思ふても油斷をして居つては何日か大變なことになる憂がある。

二月八日

■敎ふるは學の半……（書　經）

人に物の敎へるこ云ふことは獨り學問だけでは無く、其他いろ〳〵こあるが、此の「オシヘ」の字は學問を敎へる意味にあてはまる、此の語の意義は他人に物を敎へやうこすれば、自分も何か調べねばならず、且つは既に忘れてある古い記臆も辿つて覺へ出すことも出來るから自分一人で勉強する半分だけの德があるこ云ふことである。

二月　九日

■寧ろ鷄口となるとも牛後になることなかれ……（十八史略）

是れはよく人の知つて居る語だが、其出所は後に趙の肅候に封せられて武安君こ名乘つた蘇秦こ云ふ人、此の人は洛陽の生れで、辨口を以て楚、燕、齊、趙、韓、魏の六ヶ國を合從せしめ、自分は其從約の長こなり遂には肅候にまでなつたほどだから餘程口先の旨かつたに相違は無い、それでまだ左程まで出世をせぬ以前、諸侯を說いて廻つたことがあるが、至る處で何々數千言謀言る内「何うも貴下なぞはお身分は立派でも上に君主を頂いて居るから矢ッ張り家臣の名は免れぬ、それよりも小さくこも一國の領主こお成りになつては何うです、鷄の口は少さくこも全体の身体を養ふ肝腎な處だから貴いが、大きくこも牛のお尻は陋いものを垂れ出す塲所だから甚だ賤しい、失禮だが今の貴下の身分は牛のお尻のやうなものだ、それよりも寧そ鷄の口にお成りなさい」こ云ふたのが初まりである。

二月　十日

■業は勤むるに精しく、嬉むに荒む……（文章軌範）

是れは當然のことで、勉强中に餘事の娛樂に耽つては其勉强は決して勉强にはならない、尤も古諺に、よく遊んでよく勤めこ云ふことはあるが、是れは遊ぶのを主眼こしたものでは無く、勉强ばかりやつて居つては身体の爲めによく無

いから、合間〳〵に身心を養ひ、元氣をつける爲めに遊べと云ふ意義である、約まり勉強すべき元氣をつけるだけの程度で遊べと云ふたことだ、學校なんかに運動、遊戯なんかの時間を加へて居るのも是れが爲めである、然るに世には此の意義から外れて肝腎の勉強よりも遊ふ方に凝り固まつて仕舞ふものがあるが是れは甚だ宜しく無いから注意すべきである。

二月十一日

■天下生じ易き物ありと雖も一日之を曝めて十日之を寒さは未だ能く生ずるものあらざるなり……（孟　子）

孟子が君王の御前へ出て樣々と君國のお爲めになることを言上することは屢々あつたが、君王のお側に居る近臣等は君の御機嫌を取りたいばかりに孟子の居らぬ時にはツマラぬことをいろ〳〵と申し上げる、それが爲め孟子が切角言上したことも消されて仕舞ふところから「何うも困つたことだ、自分は御前へ出

るのは偶のことだが、近臣等は始終お側に詰め切つて御機嫌取りばかりをして居るから何うも仕方が無い、是れでは折角芽の出かゝつた草木を、一日曝めて十日寒かすやうなもので直に萎めて仕舞ふ」と嘆いたが、是れは獨り孟子と君王との話だけでは無く世の中には隨分此んな例があるから、君王ミミでは無い仮令一家の主人だらふが何んだらふが近臣の爲めに阻まれるやうな例の無いやう氣をつけねばならぬ。

二月十二日

■木に緣つて魚を求む……（孟　子）

現今の學説には木に棲んで居る魚があると云ふことだから、此語は少々通用出來がたくなつたが、語の意味は「望んでも迚も得られるものでは無い」と云ふことで是れは宣王が軍を興して近國を征服しやうと考へられた時、孟子が御前に進んで練めだ言葉である。

二月十三日

■過ぎたるは猶及ばざるが如し……（論　語）

孔子の門人で子張と云ふ人があつたが、中々の才子ではあつたけれども才が利きすぎて兎角物事に出しや張りたがるものだから、孔子は其事を云はれたものである。

二月十四日

■二人心を同じくすれば其利金を斷つ……（易　經）

昔毛利元就が死期に望んで三人の子を病床に招き、三本の矢を以て兄第が共力して事に當るの強きを覺らしたことがある、此語も天れと同じやうな意味で一人では左程で無くとも、二人心を同じくすれば堅き金をも斷つことが出來ると云ふことだ、世に最も睦じい朋友を斷金の友と云ふが其語源は是れから出たものである。

二月十五日

■大義親を滅す……（左氏傳）

君國の爲めには父子兄弟の親を滅しても盡さねばならない、此語は衞の石錯と云ふ忠臣。主君の桓公が其異腹の兄弟、州吁と云ふものゝ爲めに弑され、州吁が代つて位に就かふとするのを陳の國の力を借りて是れを誅して了つたことに初まる、尤も我國にも親を滅して大義をたてた忠臣の例は古來の歷史を迦れば隨分と尠くは無い。

二月十六日

■成事は說かず、遂事は諫めず、既往は咎めず……（論　語）

既に出來上つて仕舞つたことは其是非を說いた處で是れも仕方が無い、また最早遂けやうとして居ることは側から何んと諫めた處で是れも駄目だ、それから既に過き去つたことを咎めた處で死んだ子の年を數へるやうなもので何んの甲

斐も無いと孔子が其門人の宰我と云ふ人を戒めた言葉である。

二月十七日

■歳寒ふして然る後松柏の凋むに後るゝを知る……（論語）

國亂れて忠臣現はれ、家貧しくして孝子出づと云ふ語と同じ意味だ、萬木の葉が青々と生ゐ茂つて居る時には松も桐も同じく見ゐるが、秋風が吹き、寒さが次第に加はつてくると脆い葉は次第に凋落して仕舞つて所謂枯木立になつて仕舞ひ、只だ松柏のみは依然として其色を變へずに舊態を存して居るから初めて其實質を知ることが出來る、世の中の人事も其通りで平穏無事の時には猫も杓子も同じやうに見ゐるけれども、何か事のある時には人の價値が判るものである。

二月十八日

■堪忍のなる堪忍は誰もする、ならぬ堪忍するが堪忍：（古歌）

誰れでも持ち耐へるやうな辛抱なれば決して辛抱とは云へない是れは普通のことで、普通の人間ではトテも忍び得無いことを耐ゐ忍んでこそ初めて堪忍と立派に打ち出すことが出來る、彼の韓信が市人の股の下を潜つた、無論恥を知らぬものだとか、身分の無いものなれば時には人の股をくゝるくらいは屁とも思ふては居らなんだらふ、けれども韓信は相當の身分もあれば權式もある、云はゞ紳士だ、それが其頃普通の人間から最も卑しいと云はれた市人に散々辱しめられた揚句の果が其股を潜らされたのだから何れだけ口惜かつたかも知れない韓信ほどの身分もあり、權式もある人間としては到底耐へ忍ぶことは出來ない筈だが、韓信は涙を呑んで夫れをやつた處に韓信の價値がある、と云ふて市人の股を潜つたから韓信が豪いと云ふのでは無い、萬事に就て夫れくらいの辛抱があつたから遂に立派に成功をしたのである、市人の股を潜るくらいなれば今日そんじよそこらにフロックコートに八字髭を生やして威張つて居る人間に紙

幣束でも見せれば吃度潜るに相違は無い、いや、股ごころが監獄署の門をすら潜つたものさへ近頃隨分とあるのだもの…………。

二月十九日

■肉多しと雖も食氣に勝たしめず…………（論語）

食氣とは飯のことである、飯は人間の主食で肉は副食物だから、如何に美味いと云ふた處で主食よりも副食物を多くとるのは物の本末を顚倒する譯である、そこで此語ば事を食事に籍りては居るが、萬事につけて本末を顚倒しては不可ないと云ふ戒めである。

二月二十日

■瓜田に履を納れず、李下に冠を整さず…………（古諺）

物の間違ひと云ふものは何んでも無いことから起る、今日世界各國の監獄署内に刑事被告人として繫かれて居るものは中々澤山あるやうだが、其内には實際

犯罪には少しも干與せず全くの嫌疑によつて引かれたものも尠くはあるまい、が併し如何に峻然な警察官でも無辜の者を拘引すべき筈は無い、拘引するには必ず依つて來る處のある筈だ、其引かれたものは別段盗む氣では無くとも瓜畑へ這入つて履の紐を締め直して居つたか、李の樹の下へ冠の曲だのを正して居るのを遠方から見て瓜盗人、李泥棒と間違はれたと同じやうなことがあつたに相違は無い、自分には疚しいことが無くとも、他人の疑ひをひくやうな場所へ行つたり行爲をやつてはトンダ災難を蒙るものである。

二月二十一日

■遼東の豕…………（十八史略）

世の中に已れより豪いものは無いと獨りよがりをすることで、鳥なき郷の蝙蝠と云ふのと其意味は同じことである、此の語源は後漢の光武帝が王郎を征討した時に、彭龍と云ふ人が力を盡して加勢をした功によつて、其事が果てた後、

漁陽の大守に封ぜられたが、彭龍は是れが氣に入らない「今度の戰で俺れの勳功は大したものだ、それに何んだ、僅か漁陽の大守くらいの役目を以て其功を償はれるなんテ不公平極まる、俺れなんかはまだ〳〵モット大官に任じられるくらいの功績があつたのだに……」と大變に不平を抱いて居ると、夫れを傳ひ聞いた幽州の大守、朱漆と云ふ人が手紙を送つて「遼東の冢が子を生んだが、飼主は悅んで夫れを見ると頭が白いものだから、是れは珍しい、頭の白い冢と云ふのは昔から見たことは無い、コリヤ天子のお慰みとして献上しやうと云ふので出掛けた途中、道々で出逢ふ冢を見ると何れも是れも同じやうに頭が白いからオヤ〳〵此んなことなら別段俺れの冢の子も珍しく無い、それに珍らしそうに態々天子へ献上しやうものなればよい恥曝しをするところであつたと其儘引ッ返したと云ふ話がある、然るに近頃聞き及ぶに足下は此度の勳功によつて給はつた漢陽の大守職に就いて不足に思はれておるそうであるが夫れは以ての

外のことで、今の遼東の冢ご同じく、自分だけでは他に類が無いと思ふておつても、光武帝のお側には足下くらいの功勞を立てたものが澤山あるぞ」と戒めたのが初まりである。

世には隨分此の彭龍のやうな心得違ひのものは尠くは無いが、是れは所謂自負心と云ふもので甚だ宜しく無い、此んな心が高じてくると遂には不平が曝發して大變なことを企むものだ、諸君も宜しく遼東の冢ならざらんことを願つておく。

二月二十二日

■草鞋切れても粗末にするな藁はお米の親ぢやもの……（俗諺）

勤儉力行と云ふことは世間で八釜しく云ふが、金錢を儉約して一方でよく働くだけのことを云ふのでは無い、其一面に於いて世の中に廢たれたるもの、所謂廢物を以て更らに利用の道を講じ、仮令一筋の糸屑一枚の鼻紙たりとも疎末に

せぬやうにせねば勤儉の意志に適ふものでは無い。

二月二十三日

■井底の蛙……（十八史略）

此の語は後漢の馬援と云ふ人が、舊友の公孫述を罵つて云ふたものだが、是れも前に述べた遼東の豕と同じことで、世間を深く知らぬものゝことだ「井底の蛙、大海を知らず」とは即ち何時も井戸の底に居つて外へ出たことの無い蛙は廣々とした大海のあることを知ら無い、僅かな小天地を以て是れを世界と思つて居る愚を指したものである。

二月二十四日

■二兎を追ふものは一兎を得ず……（古　諺）

二疋の兎は二疋とも一緒に捕へられるものでは無い、慾ばつて二疋とも引つ捕へやうとすると二疋ながら逃かして了つて一疋も捕ることは出來無い、それと

同じことで學業にしろ、其他何事でも一つの目的に向つて志をたてゝこそ成功するが、心が迷ふやうでは結局何方つかずて何等得る處も無いのは二兎を追ふて一兎も得ることが出來ないのと同一である。

二月二十五日

■嗟來の食……あゝ來り食へと、人を顰みて與ふる食物。……（禮　記）

齊の國が或年大餓饉の爲めに救助米を困窮して居る人民に與へることゝなつた救助米と云ふた處で生米を與へるのでは無い、粥に焚いて施すのだ、そこで役人等が出張をして大道に大釜を据へ、群がる窮民に杓で掬ふて分配てやらふと云ふので「嗟ア一同の者、早く來て喰へ」と横柄に叫鳴ると、窮民中の一人、其役人をグッと睨んで「何んと云ふ横柄なことであらふ、俺れは折角ながら唯た嗟來の食を悅んで喰ふやうな腑甲斐無しでは無い」と意氣込んで云ふた、役人の態度に餘程憤慨いたものと見へる、すると役人も流石に自分が威張りすき

たと思ふたものが俄かに言葉を改めて「いや、如何にも本官の言葉は穩かならなんだ、それでは何うか機嫌を直して喰べてくれ」と云ふたが、其窮民はよく〳〵癪に觸へて居つたものと見ゐ「なーに、そんなものを誰れが喰ふものか」と口にせずにトー〳〵飢ゐ倒れて死んで仕舞つたと云ふことである。

處が此の事を曾子が聞いて「如何にも役人の言葉はよく無かつたが、併し役人としては左程まで咎むべきほどのことでは無い、人間としては、嗟來と云はれて怒るほどの意氣は無くてはならぬが、併し自分の非を覺つて言葉を改めたならば喰へるがよいにミミミ」と云ふたそうである、如何にも道理なことで、意氣も過ぎると拗ねることになつて宜く無いものである。

二月二十六日

■備へるを一人に求むることなかれ……（論　語）

一人で多藝多能の人は無い、多藝なものに多能と云ふことは嘘だ、何れを勝れ

たと云ふことを絶對的に望むことは出來ない、多藝なれば必ず平凡で無くてはならぬ、人には必ず得長もあれは不得手なることもある、そこで人を支配し、人を指導するには其者の長所と短所を見分け其性質に應じて要所〳〵に充てがへたならば、其者も心面白く然も事は落度無く出來得るものである。

二月二十七日

■廐焚たり、子朝より退いて曰く、人を傷めたりや、馬を問ふ……

……（論　語）

子は孔子のこと、朝は朝廷のことである、孔子が朝廷から退らふとする時、自分の家の廐が燒けたと云ふことを家人が知らせて來た、そこで孔子は第一着に「誰れも怪我は無かつたか」と尋ねて、家人一同が無事であると云ふことを聞き、安心をして次ぎに「馬は何うであつたか」と聞いたと云ふ話がある、是れは馬よりも人が大切であるからだ、處が世の中には自分の秘藏の器物を家人に

命じて運ばす途中、其者が何かと打ッ衝つて酷く轉けたと云ふのを聞いて「ちよッ、大變なことをやつた、何うだ彼の器物に毀がつきはしなかつたか」と家人のことよりも器物を氣にして尋ねるものがあるが何うも大變な心得違ひと云はねばならない。

二月二十八日

■智に過ぐれば嘘をつく……（伊達正宗）

嘘にもいろ〳〵ある、人を悦ばす嘘、人を笑はす嘘、人を苦しめる嘘、己れの爲めに計る嘘、其他數へたなれば澤山あるが、此の嘘の出所はと云へば夫れだけの智惠があるからだ、智惠の足りぬものゝ嘘は直ぐ後から化の皮が現はれるが智者の嘘は人を信じさせ、何日まで經つても誠らしく思はしめる。

三月一日

■業務を逐へ、業務に逐はるゝ勿れ……（フランクリン）

世に立つて事を成そうとするものは此の心得が無くてはならぬ、何日も自分の業務に踞蹲と逐はれて居るやうではよい考へが浮ぶ間も無ければ、機を捉へる事も出來ないが、爲すべき事を切々と方付けて仕舞へば、其後は心も愉快に、所謂餘裕綽々として新らしい思想を産み出すことが出來る。

三月二日

■始めは處女の如し、敵人戸を開く、後には脱兎の如し、敵拒ぐに及ばず……（孫　子）

語は兵を使ふ道を述べたものであるが、是れを一般處世の上にも及ぼすことが出來る、此の語の意味は敵を攻めるに最初は處女の夫れの如く穏やかに搆へたなれば敵は頭から見くびつて仕舞つて用心を怠る、其機を察して俄に脱兎の勢ひで押し寄せたなれば、今まで見くびつて油斷をして居つた敵は、一も二も無く崩づれて拒ぐことが出來無いと云ふのであるが、是れを日常のことに例して

見るこ、人は何れほど自分を輕蔑しても構はん、そんなことに頓着は無く、自分の爲すべきことを所謂脫兎の勢ひでヅン〳〵こ行つて居れば最後の勝利は自分の手に握るのは何んでも無い。

三月　三日

■窈窕たる淑女は君子の好逑……（詩　篇）

窈窕の二字は世に美人の形容詞こして用ひるが、是れは姿形だけの美しいことを指したのでは無い、姿形も美しければ心も優しくて麗はしいことを意味した文字である、好逑は配偶のこと、そこで全体の語の意味を云へば、姿も心も美しいツマリ女こして申し分の無い淑女は君子のよき配偶であるこ云ふことである、處が世には如何はしい職業をして居つたものミミこ云ふこ聊か語弊はあるが、世間で醜業婦こまで云はれて居つた婦人には先づ此の窈窕こ云ふことは云へぬ筈である、其婦人が高官の地位にある人や紳士こ云はれて社會の上流に居

る人の夫人に成りすましたのがある、是れは決して好逑こは云はれ無い、いや男女間のことだけでは無く何事でも夫れ相當の配合が無くてはならぬ、近頃の學生にコスメチックで頭をテク〳〵光らしたり、金縁の眼鏡を伊達に鼻先へ引つかけたりしたのがあるが是れ等は以ての外のこと丶云はねばならぬ。

三月　四日

■一の快樂には千の苦痛伴ふ……（西　諺）

快樂こ云ふことは中々容易なことで得られるものでは無い、樂は苦の種、苦は樂の種こ云ふ通り、快樂を得やうこすれば其後から必ず苦痛が伴ふものこ覺悟をせねばならぬ、身を苦しめて業務を勵んだあこでは必ず愉快が附いて廻るものだ、處が世の人は愉快を望むが苦痛こ云ふことは實際其身に及び來るまで一向お氣が付かれない、是れば甚だよく無いことであるから宜しく愉快を忘れ苦痛をのみ心掛けて居りたいものである、さすれば知らぬ内に愉快が必ず其身に

來るに相違は無い。

三月五日

■末の世は祈求むる其事の、驗無きこそ驗なりけり……（最澄）

末の世とは末世、即ち人道の頽廢した世のことである、人道が頽廢すれば道義と云ふことは人の心にありそうな筈は無い、道義の無い人間が何んなことを神や佛に祈つた處で驗の無いのは當然のことである、菅公の歌に「心だに誠の道にかなひなば祈らずとても神や守らん」眞實其通りで道義の無いものが千萬言祈を捧げた處で何んの驗も無いが、心さへ誠道を守つて居れば神で無くとも世間の人が信用を以て迎へてくれるから自分の身を守つてくれて居るやうなものである。

三月六日

■足るを知らば常に足る……（老子）

人間の慾には制限の無いものである、巨萬の財を積んで天下の富豪と云はれて居るものでも矢ッ張り金をほしがつて居るのは慾に制限が無いからだ、言ひ換へれば足るを知らんからだ、足るを知らぬ人間の心は常に安まる時は無い、それよりも其日暮しの人間で「今日是れだけ儲かつたなればまア〳〵結構〳〳〳〳」チなことで足るを知つて居る貧民の方が何れほど心が長閑か判ら無い。

三月七日

■江南の橘、江北に生して枳となる……（晏子春秋）

土地變れば品變る、浪華の芦は伊勢の濱萩と云ふやうなもので、同一の物品でも土地〳〵によつて名稱を異にしておるものである。

三月八日

■書は以て姓名を記すに足るのみ、劍は一人の敵、學ふに足らず萬人の敵を學ばん……（十八史略）

楚の項羽の負け惜みである、項羽は有名な英雄だが、性來至つて不器用であつたから學問を習つても劍法を修業しても一向に上達をする見込が無かつた、そこで叔父の項梁と云ふ人が怒つて「何故汝は勉強しない、そんなことで生長して何んになる、馬鹿めッ」と大變な權幕で云ふと項羽は至つて平氣の平左で「アッハ、叔父さん、私しは切角ながら此んなツマラぬことに何日までも勉強する氣はありません、文字を習つて處で大きくなつて儒者や書家を以て世に立つ目的ではありませんから自分の姓名だけ書ければよいでせう、また劍法だつて是れも僅か一人の敵を相手にするだけですから一向面白くも無いぢやありませんか、それよりも同じ修業をするなれば萬人を相手にする方法を習ひたふ御座います」と云ふ言葉に項梁も「夫れでは……」と今度は兵法を敎へると是れが性に合つたと見て一通りのことが判つた。

が、此の語は畢竟項羽のやうな英雄だから通用をするが、普通の人間には以て

の外のことである、今の青年中には自分の才が至らぬ處から「ナーニ、書は姓名を書するに足るだ」なんかと空威張をするものがトモすると無いでも無いけれども大いに愼むべきである。

三月　九日

■文臣錢を愛まず、武臣死を惜まずんば天下大平ならん（岳　飛）

宋の國が大に乱れた時、或人が岳飛に「當時の世の中は困つたものですな、一体太平の御代には何日成るでせう」と云ふた言葉に答へたのは此の語である、殷鑑遠からず我國でも文臣武臣が錢を愛するからトンデも無い騷動が起る、何日か世間に八釜しい醜聞を流して我國の海軍に汚点をつけ、延いて内閣の瓦解までも見るに至つたシーメンス問題も文臣武臣共に錢を愛したからだ、また性質に於て多少趣を異にして居るが、今度の白川代議士の一件から林田書記官長や大浦内相にまで飛沫を及ぼした選擧法違犯事件も其根本は矢ッ張り一萬圓と

云ふ金子が禍ひの種となつておる。

三月十日

■相順は家を齊ふの本……（朱文公）

誰れしも心の内に不平の無いものは無い、夫れを互ひに折れ合ふて穏やかにして居れば決して衝突は起らぬものだ、一家の内でも主人公は主人公で不平があれば妻君は妻君で夫れ相當の不平のあるものである、其不平を一方から口へ出すと忽ち一方も逆らふやうになり、遂には夫婦喧嘩に花が咲いて今まで圓滿であつた家庭に一つの汚点を止める、そうなると其汚点が何日までも消ゐるものでは無く延いて一家に波風の絶ゐ間が無くなる、波風が絶ゐねば主人公の不平が益々高じて心中に愉快と云ふことは丸切り消ゐ去るものだからッィ慰藉と云ふやうな譯から青樓の梯子を昇るやうになると妻君の不平は夫れが爲めに愈よ加はる、斯ふなつては眞實の乱脈で家を齊ふも何もあつたものでは無い、

三月十一日

■業繁ければ功少し……（呂氏春秋）

物事は或る一点に精力を集中してこそ實際の功果が現はれるものだが、さまざまな方面へ手を擴げたなれば到底眞實に完全に出來得るものでは無い。

三月十二日

■臍を嚙む……（左氏傳）

後悔しても追つ付かぬ無いと云ふ意味であるが此の語について此んな話がある、麝香鹿……香料として人の尊重する麝香は此の鹿の臍から取るものだそうだ、處が獵師は此の鹿を獲らふとすると鹿は追はれながら到底逃れることが出來無いと思ふと自分で自分の臍を嚙み破つて倒れる、獵師の獲らふとする目的は其臍にあるのだから、肝腎の臍が嚙み破つて仕舞はれては最早仕方が無い譯であるが鹿の方で萬一魔誤ついて居る内に捕へられてはもう仕方が無い、臍を嚙ま

ふこしても助からぬ、そこで後悔しても役にたゝぬことを臍を噛むの悔と云ふ語が出來たのだそうな。

三月十三日

■殷鑑遠からず……（詩　經）

夏の桀王は頗る暴逆な性質であつたが、これが禍ひして遂に滅亡をした、處が夏の世を次いだのは殷である、そこで殷の王は夏の代のことを深く戒めとして自分の世を治めた處から、先きの例と云ふ意味に適用して此の語を使ふことゝなつたのである。

三月十四日

■巧言令色鮮し仁……（論　語）

巧言は口先の旨いこと、令色は表情の上手なことである、此語の意味は人に接して口先の旨い表情の上手なものは心の内に德性を持つて居ら無いと云ふこと

であるが、是れは今も昔も變ら無いものと見ゐる、著者の知人にも此の巧言令色のものが一人ある、其旨い辨口と上手な表情を以て親切そうに他人に取り入るのは中々に妙を得て居る、初見の人も二度三度逢ふ内には十年の知己かのやうな有樣となる、が辨口の旨いに任して隨分と法螺も吹く、大風呂敷も廣げる其内には吹いた法螺の音に乱ひが生じ、廣けた大風呂敷に穴があいてツイ褸襤を出し、切角十年の知己かのやうになつた間柄も其劣等な性質を見透かされて二月三月經たぬ内に先方から交情を破られ、敬遠主義を以て追ひ拂はれるやうなことゝなる。

三月十五日

■怒は失敗の第一歩なり……（アリストートル）

怒の原因は短氣だ、昔から「短氣は損氣」と云ふ通り、短氣を慎しんで怒を發せぬやうにせねば切角成功に近いた事業も根本から覆へすことがある、殊に血

氣盛んな青年は尙更ら短氣を出し易いものだから大いに氣を注けねばならぬ。

三月十六日

▣うきよをば何んの絲爪と思ふなよ、ぶらりとしては暮されもせず…………（蜷川親當）

人間が此世に生をうけし以上は何か一つの功をたてねばならない、神は無用のものを生せずと云ふ諺もある通り、世の中にあるものを精細に考へたなれば無用の長物は無い筈だ、或人は此んなことを云ふた「蚤一疋でも人間に取つては有用である、何故有用かと云ふに蚤は不潔な處へ生く、清潔に掃除をすれば蚤は生きたくも生けるものではない、さすれば蚤によつて人間は清潔と云ふ觀念を益々起さしめるから有用だ」と云のであつたが、成程此んな理屈でもつてゆけば無用のものはあるまい。

いや、話は岐路へ外れたが、蚤ですら人間に有用なものだとすれば況して萬物

の靈長たる人間は尙更ら以て社會の爲めに有用で無ければならぬ、自分の家に財産がある、家祿があると云ふのでブラ〳〵と遊んで居るやうでは喰ひ潰しの遊民で、一疋の蚤にすら愧じなければならない譯である。

三月十七日

▣思慮無き人は常に談ず……（ホーマー）

人間は用も無いのにベラ〳〵と諜言ろものでは無い、著實な人ほど言葉を愼しむものである、口は只だ用を辨ずるれば夫れでよい赤穗四十七士の頭領として世に名高い大石内藏之助も平素は寡言沈默で口數が尠かつたから家中のもの等が内藏助に對して薄ボンヤリして居ると云ふ意味で晝行燈と名けた、けれども一朝主家の大事と云ふ場合に望んで内藏助のたてた氣量は中々非凡であつた、彼れでこそ立派なものだ、人間は用の無い限り内藏助の輩に倣ふて晝行燈で居りたいものである。

三月十八日

■過つては則ち改むるに憚ることなかれ……（論　語）

過ちと云ふことは何んな立派な人にでもある、處が精神の修養が出來た人なれば夫れと氣が付くと直様改めるから、其過ちも癒つて仕舞ふが、小人はそうじや無い「アッ仕舞つた、わらいことをした」と氣がついても自分の失策を押し包んで改めるどころかコッソリ知らぬ顔をキメ込まふとするものもある、そんな人間は仮令過ちがあつた處で誰れも注意をしてくれるものもなく、何時まで經つても立派な人間になることも出來無い。

三月十九日

■故きを溫ねて新らしきを知る、以て師となるべし……（論　語）

物事は新しいものを以て決して新らしいことすべきものでは無い、新らしいものの原因は故きものにあり、學問なんかでも進歩するのは既に習つた處を何度も復習をやつて土臺とするからだ、從つて故きものは師となる道理である。

三月二十日

■人を恕して己を恕する勿れ……（菜根譚）

恕すは許すである、人を恕すると云ふことは中々に六かしい、人か何か自分に對して失敬なことをやると怒りたいのは人の情だが、是れは耐わ忍んで恕してやるがよい、けれども自分の行ひに何か過ちがあれば是れには少しも容赦無く自分の心を責めねばならぬ、自分の心を責めて直ちに改めねば、少しの事なりども捨ておけば軈て大なる過失の生ずるものである。

三月二十一日

■燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや……（十八史略）

秦の世に陳勝と云ふものがあつた、自分の家は百姓だもんだから子供の頃には畑へ出掛けて行つて鋤鍬を取つて居つたが、或日晝休みの時に畦の上へ腰を掛

けて側に居る百姓等を見返り「なァ何うだ、今はお互ひに此んなことをやつて居るが、若しや立派に出世をしても御同前の誼は忘れんやうにしやう」と云ふと一同のものはカラ〳〵と打ち笑つて「アッハ、此の小僧生意氣なことをぬかすな、百姓の癖に立派な出世なんて何うして出來るものか、つまらぬことを云はないでソロ〳〵仕事に掛らふぜ」と鼻先で笑つて誰れ一人相手にするものが無いから陳勝は嘆息して「馬鹿ッ、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんや」と吐鳴つたと云ふ話がある。處が此の陳勝は二世皇帝の時、反逆を起したから逆徒の誹は免れぬが、それでも大言通り立派に出世をして張楚を云ふ國王にまでなつた。此の語の意味は小人は偉人の大志あるを知るものでは無いと云ふことである。

三月二十二日

■狡兎死して走狗煮られ、飛鳥盡きて良弓藏り、敵國破れて謀臣亡ぶ……（十八史略）

一國の爲めに大勳功あつた韓信も、讒者の口にかゝつて捕へられたが、其時韓信が此の語を口にして長嘆した、成程走狗の重んぜられるのは兎を取るに用ゆる爲めである、其獲るべき兎が無くなれば走狗の必要も無い、良弓だつて其通りで大平の世には空飛ふ鳥を射る爲めに用ひられるが其鳥が無くなれば袋に納められる、謀臣に於ても敵國を倒す爲めに智略をめぐらす必要があるから用てくれるうけれども敵が既に破れて仕舞へばた謀臣も最早必要が無いから亡ぼされて仕舞ふのは走狗や良弓と同じ道理である。

三月二十三日

■己の聰明に據ること勿れ……（聖　書）

才餘つて己を傷くと云ふのと同じやうな意味である、智のあるものは其智の爲めに失策り、才あるものは才の爲めに一生の方針を誤るものである、自分が賢

い、自分は何事も出來るこ自負の念を高めておつたなればトンデも無い失敗を招くことがある。

三月二十四日

■學は君子たるを求むる所以……（揚　子）

處が現今の人は君子たるを求めずにパンを求めん爲めに學を修める、それもよい、それもよいが併しパンを求めることが切なる爲めに學問の本髓を覺ら無い人を說きて善道に導くべき筈の宗教家が破戒の行爲をやることは珍らしく無いにした處で、酷いのは何日かの新聞紙に中學校の倫理の教師が有夫姦を犯して同衾の現場を夫の爲めに見付かつたこ云ふやうなことがあつた、斯ふなつては君子ごころの問題では無い。

三月二十五日

■白なりや夢一すじの心より……（加賀の千代女）

是れは別段管々しく說明をするにも及ぶまい。

三月二十六日

■寇に兵を籍し盜に糧を齎す……（史　記）

敵國に兵を籍せば味方の不利を招くのは必然のことである、泥棒に糧を與へれば泥棒を益々跋扈せしめるやうなもので是れほご愚なるものは無い。

三月二十七日

■機事密ならざれば則ち害成る……（易　經）

機事は機密である、機密は決して發表すべきものでは無い、軍機、商機、其他事に處するの機密は最も秘すべきである、處が秘すべき筈の機密も僅かなことから他に洩れるものだ、殊に人情こして他人の秘事ほご尙更ら知りたがるものだから萬一洩れた場合は忽ちに八方へ傳はる、そうなるこ機密にして居つたこだけに其反動こして大變な不利益を見るやうなことになるものだから機事は

宜しく秘密の内にも秘密にせねばならない。

三月二十八日

■鼎の輕重を問ふ……（左氏傳）

楚の莊王が陸渾の戎を征討に向つた時、其餘勢を以て周に向はふと云ふので周の國境まで軍を進めた、處が當時の周は餘程衰頽して居つた折柄だから莊王の軍を邀へて戰ひを開く力が無い、そこで莊王の機嫌を取らふと云ふので王孫滿と云ふ重臣を遣はした、すると莊王は王孫滿を引見して鼎の大小輕重を問うた此の鼎と云ふのは夏の禹王が九ケ國の大名に命じて金を獻ぜしめ、夫れを鑄て九つの鼎を拵へたのが夏から商に、商から周に傳へたもので周の國璽として成つたのである、王位に上るには是れが無くてはならぬやうになつて居つたものだから、莊王の王孫滿に問うたのは是れから周に迫つて天下を自分のものにしやうとする意をほのめかしたのは云ふまでも無い、すると王孫滿は「左樣で御

座います、彼の鼎は昔夏の禹大王が……」と鑄造のことから其來歷を語つて「斯樣の次第で彼の鼎は世を易にること三十世、年を過ごすこと七百歲、今や周王の德は衰へては御座いますが、天命は未だ改まりませんから鼎の輕重は未だ問ふべき時では御座いませんと云ふたので、莊王も返す言葉が無かつた。

で、此の語の意味は云ふ迄も無く王位を狙ふと云ふ意味だが、現今の我國では政爭の上で內閣の椅子を狙つたり、一般の野心家が或る重要な椅子を狙ふことに適用することゝなつておる。

三月二十九日

■暴虎馮河して死して悔なきものは吾れ與にせざるなり（論語）

暴虎は虎を一打ちに打ち殺すこと、馮河は大河を徒涉することである、孔子が或時顏淵に向つて非常に讃辭を以て賞めて居ると門弟の子路と云ふ人、是れは氣質の荒々しい豪傑肌の人だが、先生が餘りに顏淵を賞めるのを聞いて遺がに

心悪く思ふたものと見ゐ横合から口を出して「時に先生、先生は顔淵を頻りにお褒めになられますが、併し先生が若し大軍を率いて戰場に向ふとすれば其軍師として誰れをお擧けになられます」と問ふた、子路は斯ふ云へば孔子は必らず「そりや其時はお前より外には無い」と云ふだらふと潛かに期待をして居ると、孔子はニタリと笑つて云ふたのは此の語である、然も是れに附け加へて「必ずや事に臨んで懼れ、謀を好んで成さんものなり」と云ひながらヂロリと顔淵の顔を見たので子路は案外の面地で大いに凹んで仕舞つた、尤も孔子の心では子路を凹ますのを目的としたのでは無い、子路の性質を常々から憂ひて居るので事につけて戒しめたことが屢々あつたが是れも其一つである、と云ふて此の戒めは子路ばかりぢや無い、我れ〳〵に於ても此の戒めを深く心に壘んで居れば社會に立つても失敗は決して無からふ。

三月三十日

■名譽は鴻業の香氣なり……（ソクラテス）

花が咲けば匂ひも必ずある、鴻業を旨く仕遂げたなれば花が咲いたやうなものだ、さすれば其匂ひこすべきは名譽である、名譽の添はぬ鴻業は誠の花では無い、世に事業を起す上は匂ひのある花を咲かせたい。

三月三十一日

■大人は赤子の心を失はず……（孟　子）

此に云ふ大人とは年長者のことを云ふのでは無く、所謂君子の稱、失はずとは失ふては不可無いと云ふ意味である。

此の語の意味は赤子は無邪氣な毒氣の無いものだが、君子たるべきものは無邪氣な毒氣の無い赤子のやうな心を持つて居らなければならないと云ふたのである。

四月一日

■長者に貪を語る勿れ……（古　詩）

金滿家は貧乏人の苦みをした覺が無いから、其困しい境遇を語つて救ひを求めた處で一向判るものでは無い、判らんから同情の念も薄い道理だ、俗に云ふ「人を見て法を說け」と云ふのは是れである。

四月二日

■若し藥瞑眩せざれば厥の疾瘳ゆず……（書　經）

重ひ病氣を癒そうとすれば激しいこと目まひするくらいの藥を用ひなくば効能のあるものでは無い、だから何事でも重大なる事件に對しては嚴しい方法を取らねば駄目である。

四月三日

■心に銘し骨に鏤む……（書言故事）

德を讃へ恩を深く胸に記して忘れぬことである、今日は皇祖神武天皇の御靈を

慰め奉つる大祭日であるから此の語を特に撰んだ、神武天皇の此の秋津州根に垂れさせられた宏大なる御聖德は我れ〳〵臣民として長なへに忘れることは出來無い、是れを忘れ皇統連綿たる皇國の掟に導はぬものは國賊である。

四月四日

■兵を養ふ千日なるも用は一朝にあり……（水滸傳）

莫大な費用を以て海に澤山な軍艦を浮べ、陸には師團を置いて何萬何千萬の兵を備へて居るのも一朝國家に事のある場合に當らしめん爲めである、事に臨んで俄かに慌てた處で人間が揃ふても訓練が出來て無いから何んの足しにもならない、俗に云ふ、泥棒を捕へて繩を綯ふやうなことでは何んの等の間に合ふものでは無いのは獨り軍事にばかりでは無く、處世の道に於ても同樣であるから平素から豫じめ何につけても用意をしておかねばならぬ。

四月五日

■心に我慢ある時は愛嬌を失ふ……（德川家宣）

愛嬌は人間の花である、從つて愛嬌の無いものは無味干燥なもので他人の氣受けが甚だ宜しく無い、處が心が傲り慢つて我慢の角が出ると其反比例に此の愛嬌が失せて仕舞ふものだから、人間に愼しむべきは我慢である、殊に痩せ我慢と云ふやつは兎角事を破りたがるものだから注意をせねばならぬ。

四月　六日

■朽木は雕すべからず、糞土の牆は朽すべからず……（論　語）

孔子の門弟に宰予と云ふ人があつた、後には孔子の十哲に數へられたほどだが修業中には懶け者の晝寢好きで居るから仕方が無い、是れには遺がの孔子も手古摺つて「朽木には彫物は出來無い、糞土のやうな柔かな土の塀は鏝すること出來ぬ、宰予も恰と其通りで彼のやうな懶け者へは何を訓へた處で馬の耳に風だ」と云ふ言葉を聞いた宰予は此の言葉に非常に發奮したものと見ゐ、夫れから後はヅン〳〵と成績もよくなつたが、世の青年諸君も此の朽木や糞土に譬へられぬやうにし給へ。

四月　七日

■之れ戒めよ之を戒めよ、爾に出づるものは爾に反るものなり……（孟　子）

此の語は孟子に出て居るが、語源は曾子の云ふたものである、鄒の國が他國と戈を交ゑた時、旗頭となつて居る大將株が澤山討死をしたのに軍卒は一人として手傷すら受けたものが無かつた、それが爲め一つの問題が起つたと云ふのは外では無い、斯くまで大將株が討死を遂げるのに一人の軍卒も倒れぬと云ふのは軍卒共等は自分の大將株を先登に出して自分等退込みをして居つたのだらふ夫れで無くとも仮りにも自分等の上官を見殺しにすると怪しからんと云ふので一同の者を斬罪にしやうと云ふことになつた、が何しろ一軍の軍卒だから中

々一寸やそつとの人數では無い、大變な多數なもんだから軍國の折柄、無殘〳〵殺して仕舞ふことが出來難い、と云ふて捨ておけば軍規に關すると云ふやうな考へから穆公が孟子に向つて「實は斯ふ〳〵云ふ仔儀で處置に困るが何んとすれば宜しいか」と聞くと孟子は「そりや何うも自業自得だから仕方が御座いません、大体から云へば旗頭になつた役人（鄒では平時は普通の上役人で、戰時には旗顏となつて戰場に向つたものと見ゐる）等は平素人民等を虫螻のやうに扱つて人民等を困しめたから、軍卒になつた人民等は夫れを根にもつて返報をしたもので御座います、夫れにつけ曾子は斯樣に云はれて御座います」と此語を語つたが、此語を平易に碎いて云へば「氣をつけろ〳〵、自分のしたことは宜かれ惡かれ必ず自分に返るものであるぞ」となる。

四月　八日

■主を重んじて法を畏るべし……（保科正之）

是れは別段管々しく說明するまでも無い、主を重んじぬやうでは不忠の名を免かれ無い、法を畏れぬやうでは赤い獄衣を着ねばならぬことゝなる。

四月　九日

■面白の酒宴や本心を失ばぬほど……（小早川隆景）

人酒を飲み、酒酒を飲み、酒人を飲むと云ふ諺もある、人酒を飲む内はよいが量が進むに從ふて酒々を飲むやうになり、遂には酒に飲まれるやうになつては前後不覺になつてしまつてトンデも無い失敗をやることになる、そこで孔子も「酒は量なけれども乱に及ばず」と云ふておる、世の中には酒を飲んで管を捲いたり、人に迷惑をかけたり乱暴をやつたりするのは酒を飲んだのでは無く酒に飲まれたのだ、外國では酒の爲めに顏を赤して往來を歩さへ紳士としての態度では無いと云ふておるそうだから飲酒家は大いに愼しまねばならない。

四月　十日

■蛟龍雲雨を得ば終に池中の物にあらず……（十八史略）

蛟は俗にみづちと云ふて龍の一種である、此の語は才氣のあるものは何日までも平凡として社會に隱れて居るものでは無い、機會を得たなれば必ず名を成すほどのことをやると云ふ意味だが、語源について斯んな話がある。劉備が曹操と戰つて敗北し、諸々を放浪して居る折柄、或時吳の孫權に領内に足を止めておつた、處が孫權の配下の大將で周瑜と云ふ人、孫權へ對して上申書を奉つた文中に「關羽、張飛も猛將であるが、現今御領内に居る劉備も只物では無い關、張の兩名ですら御領内に置いておくのは油斷が出來ぬのに今また劉備がやつて來て三名のものが揃ふて見ると中々以て油斷は出來無い、彼れ等三名一つに集まつて時機が來たならば蛟龍が雲雨を得て天上する如く何んなことをやるかも知れまいから今の内に三名を引きはなし劉を旨く云ひくるめた上で都へ招びよせ野心を起さぬやう待遇れるが宜しふ御座いませう」と認めてあつた、處

が孫權は「なーに、彼奴等何を仕出かすものか」と氣にも止めず打ち捨ておくと、其後劉備は機會に乘じて雄飛を初め、終に漢の照烈皇帝とまで爲つた。世に力あつて功名をたて得ることの出來ぬのを「髀肉の嘆に絶にぬ」と云ふが此の語も劉備から出たものである、是れは蛟龍云々には何んの關係も無いけれども劉備の話の序に述べて見ると斯ふである、

劉備が放浪の際に劉表の家へ逃れて來て暫らく厄介になつて居つたことがある處が或日のことに厠から出て來た劉備の顏を見ると意氣消然として甚だ振はない、尤も失意の折柄だから元氣のありそうな筈は無いが、夫れでも厠に入る前とは大變な相違だから訝かしく思ふた劉表は其譯を問ふと「いや外では無い、今日までは氣が付かなんだが、今厠へ行つて何氣無く自分の股を見ると情なくなつた、是れまでは始終馬に乘つて居つたから股の肉は鞍の爲めに磨れて固くなつて居つたけれども、今見ると其痕は消え失せて肉に締りが無くなつて居る

が自分も次第に歳を經ばかりで最早世に出ることも無く此んなことで一生を送ると思ふと何うも心外に絶へられない」と云ふた、僻は内股のことである。

四月十一日

■惡魔も又聖書を引用す……（セキスピア）

惡魔は惡魔である、罪惡を犯すのを屁とも思はぬ徒者である、聖書はまた基督が人道を說いた聖の聖なるものであるから、惡逆のものには何んの必要ごころか正反對のものだが、夫れでも聖書を見て勝手な理屈をつけるものだ。

四月十二日

■天は萬物を平等に擁護す……（ポープ）

世に天ほど公平なものは無い、天の惠みは男女老幼は元より善惡正邪の別ち無く平等に與へられるものである、惡人だからと云ふて日の光に浴することが出來ぬと云ふやうなことは無いが、惡人は自分の爲めに暗い牢獄へ投ぜられて自

分と自分で日の光に接することの出來ぬやうなことになるのだ、約まり天は何人にも區別をつけぬが、人は自ら區別をつけられるやうなことを仕出來するのである。

四月十三日

■背水の陣……（十八史略）

韓信が考へ出した軍法の一つである、韓信が趙を攻めた時、趙も砦を開いて激しく戰ふて中々萎みそうな模樣が無い、そこで韓信は負けたやうな風を裝ふて味方の軍を水邊まで引きあげた一方、二千の兵を分つて間道から敵の側面へ廻らせた。

趙の方ではそんなことは知らぬものだから「ソラ寄手が逃げたぞ、此の虛に乘じて一氣呵勢に打ち破れ」と云ふので城内の兵が大擧して大變な勢ひで追擊をする、と僞つて逃げた韓信の軍勢である、水邊まで逃げては來たが、此上は船が

無くては逃れることは出來ない、最早死地に陷つたやうなものだ、こすると韓信は機を計つて「それ進めッ、此上逃げたなれば水に溺れて犬死をせねばならない、それよりも同じ死ぬのなれば敵に當つて武士らしく勇ましい討死を遂けよやッ」と下知を下したものだから部下の將卒は死物狂ひになつて「それッミ」と忽ち踵を返して敵に向ふと、敵の方では最早大勢は我が軍の大勝利であると云ふので稍安心をして氣の緩んだ折柄だけに不意を喰つて大變に驚いて「おやッ、是りや何も大變だ……」と云ふやうなことから見る〳〵内に崩れ立ち引つ返して本城へ駈け込まふとフイと見ると間道から廻つた韓信の勢は何日の間にか城内へ討ち入つて赤い旗印を立て並べ、既に占領して居る樣子に二度吃驚斯ふなると趙の勢は士氣も何もあつたものでは無い、ワイ〳〵と騒いで、マゴ〳〵して居る處へ盛り返した韓信の勢は、城内へ入り込ませた勢と一つになつて滅茶〳〵に討ち破り敵の大將を生捕るやら夥多の敵勢を討ち取つて大勝利を

得ることゝなつた。

尤も此の軍法は甚だ大膽なやり方で罷り違へば全軍全滅をするやうな危險があるやうに思はれるが、韓信の勢は云はば烏合の兵で統一と云ふことは行はれ難い剩さへ、爾後に逃げ道があれば、愈よ味方が危いと云ふ場合我れ一と逃げ出す慮があつたから、其氣を察し逃げることも出來無い死地に入れて絶体絶命の死力を出さしたものである、是れは獨り兵法だけでは無い、何事でも死力を以てすれば望みが遂げられぬことは無い、俗に云ふ一生懸命になれば何事でも成功をする、所謂精神一到何事か成らざらんと云ふやうな處に歸着するものであるから諸君も目的を立てた以上は背水の陣をひいて掛ればよい。

四月十四日

▣誠は天の道なり……（中庸）

是れは強ち説明にも及ぶまい。

四月十五日

■天に違ふ處は成ると雖も必ず敗る……（管　子）

誠は天の道である、天の道に背いた行爲は一時は成し遂げても最後の勝利は矢ッ張り誠で無くてはならぬ、惡盛んなれば天に克ち、天定まつて人に克つことは是れである、然も天定まつて惡の亡ぶ時は急轉直下頗るミジメなものである。

四月十六日

■牝雞は晨することなし、牝雞の晨するは惟れ家の索るなり……（書　經）

牝雞が晨を告げるやうなことがあつたなれば不吉の兆だと昔から云ひ傳へてゐるが、事實に於て牝雞が晨を告げる筈は無い、是れは一家の夫婦間に譬へた諺で、世に女天下、嬶天下と云ふのがある、約まり夫れだ、一家の妻君が夫の權限にまで立ち入つて指圖がましいことをするのは甚だよく無いことで天道に背

いた譯であるから一家を紊し、家運を衰へさす基だ、そんな家に限つて主人公は妻君の下馬になつて居る、それもお心よしの亭主なれば兎も角、それで無い時には夫婦喧嘩をせんまでも主人の氣持は常に甚だ宜しく無いものである、從つて家事には身が入らない、妻君は口先で亭主にポン〳〵云ふけれども金を儲ける業も知らぬときては愈よ一家の末路である、

是れを大きな例を擧げて見ると殷の紂王が妲己を寵愛の餘り、政道にまで喙を入れさせたのが國の亂を起す原因となつた、清國の末路は西太后が威嚴を揮い過ぎたに起因したことは人の知つて居る筈だ、我が國では豐家の末路は淀君にある、其他古代から太名のお家騒動と云ふやつは大抵女の口先から起つておる

「女賢しふして牛賣り損ふ」と云ふのも是れと同じやうな意味だ、それに近頃では女が社會へ飛び出して頻りと外交を揮つたり、甚だしいのになると男女同權だとが、また英國あたりでは女に參政權を得させよと云ふので穩かならぬ騒

ぎを起したなぞこは實以て論外の沙汰である、いや是れは少しく言葉は過ぎたかは知らぬが、女の美德こ云ふことは矢ッ張り内氣な處にあるやうに考へるのは獨り著者だけではあるまいこ思ふ。

四月十七日

■有德なる婦人は却て良人を左右す……（サイラス）

前章で婦人のことを餘りに頭押へにしたから茲で御機嫌を取る爲めに此の語を撰んだ譯では無い、

此の語に「良夫を左右す」こあるから所謂牝雞晨を告げるやうに考へては大變な間違ひである、有德の婦人は決して晨を告けるやうな愚を擧ばない、何れは良夫を凌ぐほごの德を備へた婦人であらふから、良夫の至らぬ處を口へは出さずに行ひに於て範を垂れ、言外に於て知らず識らずの裡に感化するこ云ふ意味である。

四月十八日

■駟馬の馴れざるは御者の過りなり……（盧鍾論）

前の二章は妻君に對することだが、此の語は一家の主人……否、一家の主人でなくこも、上は大臣を始め下は一般に人を差配するものゝ戒めである、だが茲には判り易いために態こ少さくこつて一家の主人こしておく。

駟馬の馴れざる、即ち馬車馬が御者に懷かず御者の云ふことを聞かぬのは決して馬が惡いのでは無く御者が惡いのだ、馬こ云ふやつは御し方によつて何うでもなるのだが、是れを旨く御することが出來無いのは約まり御者の御し方が不味いのに起因せねばならぬ、是れこ同じことで一家の内に牝雞に晨を告けさせたり、波風の絶ねぬやうなことの出來るのは是れを御すべき主人の御し方が至らぬからである、主人さへ旨く家内のものを御しておれば決してそんなことが起るものでは無い、今度の白川事件に就ても林田書記官長が收檻される次いで

大浦内務大臣にまで飛沫が及ばして愈よ辞職こ云ふことになるこ、總理大臣の大隈伯も天下に申し譯が無いこ云ふので「こんなことが出來たのは自分の監督が至らなかつたからである」この理由を以て辞表を畏き邊りへ捧呈した、尤も此の内容を打ち破つて見れば大隈伯は白川事件に就て何等の干與ることも無かつたであらふけれども事の大小に變りこそあれ、一家の主人も、駟馬の御者も同じく、上に立つものゝ責任が免れぬのは同じことで、伯も部下の爲めに自分も共に大官を辞しやうこしたのである、が恐れ多いことであるけれども、仁慈海の如く深き、陛下には伯の立場をお察しになつてお聽屆けに及ばれなんだのは誠に畏き極みである。

兎も角も御者たるものは駟馬を馴らすの腕を備へる覺悟がなくてはならぬ。

四月十九日

■蝮蛇一たび手を螫せば壯士疾く腕を解く……（古　諺）

蝮蛇は俗に云ふまむし或ひははぶこ云ふ毒蛇のことである、此奴に嚙まれたら直樣局部を切り取つて應急の手當をしないこ、毒は見る〳〵内ちに全身に廻つて一命に及ぼすものである、處が氣の弱い思ひ切りの惡いものは此奴に嚙まれても其處を切つて捨てるほごの勇氣が無く「やァ大變だ、何うしやう」こ云ふやうなことでマゴ〳〵して居る内に遂に全身へ毒が廻つて倒れて仕舞ふが、剛毅果斷の壯士なれば「なーに糞ッ」こ云ふので腕でも足でも惜氣なく速かにプツリこ切り捨てる意氣があるから一命を取りこめることが出來る、だから獨り蝮蛇に嚙まれた時だけでは無い、事に望んでは決斷力が無くてはならぬ、決斷に乏しく愚圖〳〵して居る内には機會を失しることもあれば臍を嚙むの憂を殘すこともあるものである。

四月二十日

■大富は則ち驕り大貧は即ち憂ふ……（列　子）

是れは人情だが、此の人情は甚だ宜しく無い、俗諺に「驕る平家は久しからず」と云ふ通り、如何に財産があつた處で驕り傲つては淡雪に朝日がさしたやうに見る〳〵消ゐて仕舞ふ、人はよく此んな話をする「百萬圓の身代があれば一日に百圓づゝ小使として費つた處で一萬日費ふことが出來る、一萬日の日數を年に直したなれば二十七年と百四十五日ある、然も百萬圓に對する利子が一ケ年に五分とした處で五萬圓あるから、一日に百圓づゝ費つた處で元金には少しも手を付けないでお剰に利子の方でまだ〳〵殘つて行く勘定だ」と云ふやうな勘定をする人がある、如何にも此の勘定からゆけば其通りであるが、併し贅澤な方面へ此の百圓を小使ひとして費ふとすると目に見ゐぬ方面に費ゐる金が此の十倍二十倍に嵩んでゆくことを思はねばならない、心の驕りと云ふことが長じて居るから、百圓の小使ひを一日に使ふとすると先づ風体や持物に莫大な金をかける、自動車でも購求めて夫れに乘つて遊びに廻る、人にボン〳〵云ふ代

りに幇間のやうな人間から煽動あげられてチヤホヤ云はれると眞逆風体に對しても二圓や五圓の祝儀では濟まないことゝなる、内心では「なーに、少々餘算が超過した處で利子だけでも一ケ年に五萬圓になるのだもの溝ふものか」と云ふやうな氣が增長する、さァ斯うなると、外の小使ひの外に内での費用がまた僅かばかりでは追つ付無い、處へ親から讓られた相當の家も氣に適らぬと云ふので建て代ゐる、其他萬事萬端が此んな調子であるから知らぬ内に利子ごころか元金にまでもヅン〳〵と手をかける、すると妙なもので減りかけた金の無くなるものは不思議なほど早いもので、何んに要つたとも判らぬ間に無くなつて利子が無くとも元金だけでも二十七年あるべき筈が僅か三年か五年も經たぬ内に元金の二割も三割も減つてある「やッ、是りや不可ん、最早節儉をせねばならない」と氣の付いた頃には驕りの習慣がついて居つてトテも節儉が出來るものでは無い、其内に焦氣が手傳ふと云ふ風で終には切角の百萬圓も滅茶〳〵に

して仕舞ふものである。

また貧人の憂ふのも是れも身を切るやうなものだ、憂れへずに家業を勵めば何日か蓄財も出來るやうになるが「俺れは貧乏で一向ツマらん」と氣も心も滅入つて仕舞つては稼業に手もつかず、苦しい世帶は尙更ら苦しくなるものであるから貧福共に心せねばならない。

四月二十一日

■死生命あり富貴天にあり……（子　夏）

死生も富貴も天命だと云ふて病氣になつても藥を口にせず、仕事もせねば稼ぎもせず只だブラ〳〵と遊んで居つては何んにもならない、自分の爲めに與にられた牡丹餅が棚にあるからと云ふて口を開けて待つて居つた處で牡丹餅の方から飛び込んで來てはくれない、だから病氣になつては手の盡すだけは養生して夫れて癒らねば天命だ、富貴も天にあるが望むために働らくものに授けられるのである、

四月二十二日

■病に遇ふて健の寶なるを知る……（菜根譚）

身体の壯健な時には有り難くも何んとも無く當然に思ふて居るが、さて病氣になつて床に寢つくやうなことがあると「ア、苦しい、早く癒くなりたいものだ」と壯健な時の有りがた味が初めて判る。

四月二十三日

■咽喉元過ぐれば暑さを忘れる……（俚　諺）

世に人間ほど勝手なものは無い、自分の苦しい時には神に祈つたり、友人の許へ助けを求めに行つたりするが、少しく順境に向つてくると神に祈つたことや友人から助けられたことを忘れて仕舞つてソロ〳〵慢心すら出てくるものもある、尤も是れは逆境に居るものゝ譬へだが、それで無くとも早い話が春になる

と「何うもよい時候になつたが、人がブラ〳〵と遊山に行くのを見てはジッチリ家に尻を落ちつけて仕事をする氣にはなれない」と不足を云ふ譯では無いが此んな理屈を付けて稼業に身を入れ無い、夏になると何うも「暑くるしい、斯ふ暑くては仕事も何もやり切れない、早く涼しくなつてほしいものだ」とぼやく、さて秋風が吹き初めると「ヤア何うも急に涼しくなつた、此んな調子では定めて病人も出來るだらふが、寧そ寒くなるものなればモッと誠の寒さになつてくれゝばよい」なんかと云ふ、其内に北風がビュー〳〵吹く頃になると「斯ふ寒くては仕方が無い、櫻の花の咲く時分は順氣もよいが……」と春の來るのを待ちかねると云ふ有樣で四季を通じて不平の絶ゑ間が無いかと思ふと、毎日〳〵雨天が續くと日和を望む、日和が續くと雨を望むと云ふ風だから、天地を差配する神が若し是を聞たなれば人間の我身勝手には愛想も盡きて仕舞ふだらふ。

四月二十四日

▣名利の人、之を小人と云ふ……（熊澤蕃山）

君子の善事を爲すには隱かにするが、小人は善事を爲すのに心からするのでは無く名利を得たいため行ふのだ、現今なんかはヤレ慈善だとか、ソレ公共事業だとかと云ふて寄附金を醵出するものゝ大部分を見ると自家の姓名を新聞紙なんかへ事々しく記載せられるのを待ちかねて居るものがある、中に甚だしいのは姓名の外に商號から業名までも御叮寧に入れたものすらあるが是れ等は論外だ、と云ふて善事に做ふものは嘉すべしと云ふ古諺もあるから丸切り行はぬものに比べたなれば勝ることは萬々であるけれども……。

四月二十五日

▣一將功成つて萬骨枯る……（古　諺）

乃木大將が明治三十七八年の役に旅順を陷いれ、大功をたてゝ凱旋をした時に

「自分は今日一同の人々から斯くまで盛んに迎へられるのは誠に以て愧かしい次第である、此度旅順の敵を討ち拂つて、首尾よく占領することの出來たのは自分の功で無く、幾千の部下の將卒が君國の爲めに犧牲となつて倒れたればこそ首尾よく望みを遂げ得たのである、それに自分だけが斯くまでにされては倒れたものゝ父兄に合すべき顏は無い、一將功成つて萬骨枯ると云ふが、自分は何うも萬骨を枯したくは無い」と云ふたことは有名な話として傳へられたが、此の語源は唐の曹松と云ふ人が吟じた詩の一句である、詩は「澤國の江山戰圖に入る、生民何んの計かあつて推蘇を樂しまん、君に憑む說くことなかれ封侯のこと、一將功成つて萬骨枯る」で此の意味は戰地になつた土地のもの等は其爲めに木樵や草苅等も出來ぬから誰れも彼れも困つて居る、だから一同の人々等は何うか論功行賞の節に大名に取り立てられると云ふやうなことを口外せぬやうにしてほしい、それで無くては一將が功を成さん爲めに澤山なものゝ生命

を犧牲にせねばならぬことゝなるからと云ふやうなことになる。

四月二十六日

■三度喰ふ、飯さへ强し柔らかし、思ふまゝにはならぬ世の中……（道　理）

世の中のことは儘にならぬのは當然である、三度〳〵喰べる御飯ですら强かつたり柔らかであつたりして思ふやうに出來ぬものだもの、自分の思惑通りにならぬと不足を云ふのは間違ひであると云ふ意味を述べたものである。

四月二十七日

■成功の秘訣は信用と努力にあり……（カーネギー）

成功の秘訣は信用と努力にありと云ふが、さて其信用は何うしたら得られるかと云ふと正道を踏むことゝ忍耐力を養ふことだ、次ぎに已と云ふとを捨てゝ誠意誠心事務に努めることにある、是れで心の內でツマラぬと思ふてもジツと辛

抱をして居れは思はぬ處から見出されて成功の端緒を得ることが出來るもので
ある、然るに世の青年等が役所にでも會社にでも這入つて是れから活社會に一
身を投じやうとするものゝ有樣を見るに最初の二三ケ月は頗る神妙だ、それが
だん〳〵と慣れてくるとソロ〳〵氣儘が出る、自分よりも出來ぬものが比較的
高給を貰つて居るのを見て不平が湧く、時には同僚と上役の惡口を利き合ふと
云ふやうなことで次第に嫌氣が增して遂に辭任をする、そして外へ行くが其處
でも半月ばかり勤めた後は同じやうなことでまたもや暇をとつて外へ行くと云
ふ有樣で何處へ行つても長續きはせぬ、其内に次第に歳が長るけれども何處も
這入つて間が無いのだから給料は相も變らず低給で信用なんかはテンで有りそ
うな筈は無く、斯くして何日まで經つても成功の見込がありそうな筈は無い、
それよりも最初行つた處で仮令給料が安からふと毎日の事務が馬鹿らしからふ
とジッと耐ね忍んで辛抱して居れば給料は次第に上る、上の人の信用が出る、

何日か知らず〳〵の内に地位が進む、すると萬事がトン〳〵拍子に思惑通りに
なるものである。

四月二十八日

■赤心を推して人の腹中に置く……（十八史略）

後漢の蕭王が賊徒を討つて降參させたが、王の部下の諸將は賊の心中を疑ふて
居れば賊の方でも一旦は降參したものゝ諸將の樣子が變だから一同は不安に思
ふて居つた、すると蕭王は其樣子を早くも察して降參した者を夫れ〳〵自分の
陣營へ歸らせて夫れに從ふ軍勢を整列せしめ、王は身輕な扮裝で別段に從者も
伴れず其場へ出掛けて行つて親しく閲兵をやると賊徒等是れにスッカリ感心を
して仕舞つて「蕭王は流石に豪い、御自分の赤心を推して人の腹中に置かれた
我れ〳〵は斯程の人の爲めなれば死を以て仕へねばならない」と一同のものは
期せずして心が一致し、此んなことを云ひ合ふて初めて安心をしたと云ふこと

である。

人を服せしめやうとすれば赤心と大膽にして大いなる度量がなくてはならぬ。

四月二十九日

■己れを抓つて人の痛さを知れ……（古　諺）

人間の喜怒哀樂は誰れしも變りは無い、自分の面白く嬉しく感ずることは人も面白く嬉しいには相違は無く、自分の嫌なことは人も同樣に嫌なものである、だから仮令下人雇人であらふとも是れを使ふには自分の身に引き比べて苛酷なことをやつては不可ない。

四月三十日

■成功とは精神の別名なり……（エマルソン）

人はよく運不運と云ふことを云ふ、彼の人は運がよいから成功したが自分は運が無いから駄目だなんかと云ふことをよく聞く、尤も世の中に運不運と云ふものがあるかも知れない、併し是れを口にするのは所謂薄志弱行の人で、自分の精神さへ確固として自ら信じた方面に力を注いでゆけば運命の爲めに左右せらるべき筈は無い、自分は不運だからと氣を腐らして仕舞へば益々不運に陷る、云ひ換へれば運命に打ち克つだけの精神を持つて居れば決して運命の爲めに捉へられるものでは無い、運命に捉へられねば世事に成功するものである、月末の支拂ひに吐息をついて苦しむのも云はゞ其月初めから精神に夫れだけの用意を怠つて居るからだ、要は此の格言の通り、成功とは精神と同一のものであるとの、精神の持方一つによつて何事なりとも必ず成功を見遂げ得らるものであると思ふて居れば間違ひは無い。

五月　一日

■人の一生は重荷を負ふて道をゆくが如し、いそぐべからず、不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば困窮したる時を思

ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ、勝つことばかり知りて負くる事を知らざれば害其身にいたる、おのれを責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるに勝れり……（德川家康）

遺がに德川三百年の基礎を固めた家康である、上下を通じて世に處するの道は此の數行によつて殆んど遺憾なく盡して居る、人は此の語を始終念頭から放さぬやうにして居れば決して間違ひの起る筈はあるまい。

五月　二日

■飽食暖衣、逸居して敎なければ則ち禽獸に均し……（孟　子）

飽食暖衣は生活上に少しも苦勞の無いこと、逸居は何もせずにブラ〳〵こと遊んで日を送つておることである、即ち此語は家に財産があるからと云ふて世の爲になることもせず、食つて寢てブラ〳〵こと遊んで居るやうでは恰で禽や獸と同じやうなもので何んの爲めに人間に生れて來たか判らぬ無いと云ふ意味だが、世

の中には隨分と禽獸に均しい……よりも金のあるに任して社會に害毒を流す禽獸以上の僞紳士が尠くないのは國家の爲めに嘆すべきことである。

五月　三日

■田有れども耕さゞれば倉廩虛し……（白　樂　天）

此の語を前の語と對照して見るも面白い、前の語は父祖の殘した財産を目途にして社會の爲めに何等盡す處なき遊民を戒めたものだが、此語は夫れに裏書をしたものと云ふてもよい、いや獨り財産だけでは無く、學識があり思慮がありその他社會の要になるべきものがありながら是れを廣く應用せぬやうでは沃野豐田があつても耕さずに捨ておくやうなもので、收穫も無ければ夫れを取り容るべき倉に一俵の米穀だつて有り得べき筈は無く、結局は無用の長物に歸して仕舞ふ譯である。

五月　四日

■雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひん……（論　語）

小事を處するに大器を用ゆるの愚なることを說いたものである、此の語に就いて斯んな話がある。

孔子の門人に子游と云ふ人があつた、此の子游魯の或村の村長になつて是れを統治するに豫て孔子から敎へられた通り禮樂を以て人民を導くと大いに治績が擧つた、處が孔子は或日此の子游の村へ出掛けて來ると陋くろしい小屋のやうな家から洋々たる音樂の聲が聞ゐるので「ホヽー、さては子游は禮樂の道を以て村民を統治して居るな、流石は子游だ」とニタリと微笑んで居る處へ子游が出迎へに來て「是れは先生、よくお越し下さいました、此の一村もお蔭をもちまして無事に治まつて居ります」と云ふと孔子は「アハツ〻〻〻」と笑つて「いや子游、雞を割くに焉んぞ牛刀を用ひん」と笑談紛れに云ふたのが非常に子游の胸に應へたと云ふのは、子游の考へでは雞を割くのに何も大層な牛刀を

用ゆるにも及ぶまい、此んな小ボけな村を統治するのに如何に乃公が敎へたからと云ふて禮樂の道を以てするのは餘りに大仰では無いかと笑はれたものと思ふたからである、そこで子游は案外の面地で「夫れでは先生へお何ひを致しまする、私しが兼て先生からお敎へ頂きましたのには、身分のある人が道を學べば人を愛し、身分の無き人が道を學べば使ひ易いと御座いましたにより、さすれば上下の隔てなく誰れしも道を學ぶべきものであると存じまして先づ禮樂を以てした譯で御座いますが、是れでは不可ませんか」と眞正面から四角八面に云ひ出したから、何心無く冗談で云ふた孔子は聊か面喰ひながらも子游の道を信じることこの篤いのを悅んで「いや子游、其方の申すことは道理である、今のは乃公の戯れぢや」と云はれたそうである。

五月　五日

■風は蕭々として易水寒し、壯士一たび去つて復た還らず（荊軻）

今日は端午の節句だから特に此の勇ましい語を選んだ、いや、勇ましいよりも寧ろ悲壯かも知れぬが、此の語は燕の太子丹の恩に感じた荆軻が、太子の爲めに秦王を討つて燕の憂を除かふと云ふので家を後に易水と云ふ川の畔まで來ると、此處まで送つて來た太子は荆の同僚等と共に酒を汲んで荆の爲めに送別の宴を開いた、其席上、輿の稍勢んた時、荆は起つて此の語を謠ひ且つ舞ふて自分の決心を太子初め一同の人々に示した、其決心とは云ふ迄も無く「一たび去つて復た還らず」で、志遂げねば二度と歸つて來ない、必ず秦王の生命を取るか、或ひは自分の一命を捨てるか二つに一つの内だと云ふ決死の覺悟である、其事の遂げる遂げぬは二段として男子と生れた上は事に當つて是れほどの覺悟が無くてはならない、詩に「男子志を立てゝ鄉關を出づ、學若し成らずんば死すとも還らず」と云ふのがある、其目的こそ違へ覺悟と云ふことに至ては荆軻と同じことだ、だが鄉關を出る時は死すとも還らずで中々勇ましいが、さて

帝都の地を踏んで漸く學が成らふとする際に至ると所謂惡魔の誘拐に逢ふて墮落をする、錦を飾つて還るか、夫れとも死すとも還らぬ筈のものが襤褸を纏ふてコソ〳〵と立ち歸つて剩さへ父兄を泣かすなぞに至つては論外の話である。

五月　六日

▣木強ければ則ち折れ易く、革固ければ則ち裂く、齒は舌より堅くして之れに先ちて斃る……（淮南子）

俗に柳に雪打れなしと云ふのと同じ意味である、強固なものは強いやうに見ゝるが或る程度を越すと反つて脆いものである、六韜三略に柔能く剛を制し、弱能く強を制す、柔は德なり、剛は賊なりとあるのも意義に於ては變りは無い、要は自分が強いからと云ふて餘りに威張ればトンデも無いものゝ爲めに倒される恐れがあるから決して威張つてはならない。

五月　七日

■勤むれは則ち匱しからず……（左氏傳）

匱しは乏しの意である。此語は深く説明するまでもあるまい、學業にしろ事業にしろ勤めて乏しいことは無い筈である。

五月八日

■言悖つて出るものは亦悖つて入り、貨悖つて入るものは亦悖つて出づ……（大學）

悖ふは背るの意、即ち正理に反くの意味である。言悖るは俗に云ふ賣言葉で、此方から「おいッ」と云へば相手は「何んだ」と云ふ「馬鹿野郎ッ」と云へば「何んだ此奴」と目を光らして此方を見る、此方から不穏當な言葉を出すから先方からも竹篦返しに穏かならぬ言葉で返事をする。又貨悖つて入るは正理に悖いて濡手で粟と云ふごとく手に入つた金錢のことで、そんな金錢は亦ツマラぬことで無くして仕舞ふものである、昔から泥棒が建てた藏は無い道理、汗と

油で正直に儲けたもので無くては決して身に付くものでは無い。

五月九日

■尺蠖の屈するは以て信びんことを求むるなり……（易經）

尺蠖は尺取虫のこと、信は伸ると通ずる處から茲に此の字を使つたものと見る、さて尺取虫が歩を進めるのを見ると一旦脊中を屈めて夫れから身体を前に伸ばす、云ひ換へれば尺取虫が脊中を屈めるのは前へ進まふとするからだ、人もいろ〳〵と艱難を忍び困苦に耐ゐるのも前途に望みを抱いて居るからである殊に學生諸君が他日の發展を期する爲めなれば正道の苦學は少しも意とするには足らぬ、それよりも世に只だ喰ふて其日を過さん爲めに無暗と腰を屈するものがあるが是等は尺取虫に對しても愧かしき次第である。

五月十日

■先づ隗より始めよ……（十八史略）

齊の國は隣國の燕が内乱の起つて居る際に乗じて兵を進めて散々に荒しまくつた、そこで新に燕の國王となつた昭王と云ふのが郭隗と云ふ儒者を御前に召して「齊は先王の時代、我が國の内乱に乗じて大變な我まゝなことをやつたが何う考へても殘念である、さればと云ふて我が國は小國である處へ斯く疲弊して居つては中々一通りで何うすることも出來まいから、先生のお力によつて然るべき賢士をば見出し頂き其力によつて先王の耻を雪きたいと思ふが」と云はれると郭隗は「左樣で御座います、無論御當國にも賢士は澤山御座いませうが併し是れを探ね出すのは容易では御座いますまい、それに就き斯樣な話が御座います、昔或國の國王が千里の駿馬を求めたいと云ふので近臣に千金を授けて探ねさしますと漸く一疋見つかりましたのは、如何にも千里の馬には相違は無かつたが最早死んで居りましたので近臣は其骨を五百金で買つて參りました、すると國王は夫れをお聞きになつて大變な御立腹で、駿馬も老ゆれば駑馬に劣

ることさへ云ふに、死んだ馬の骨を求めて何んになると云はれると近臣は少しも恐れ氣も無く「恐れながら千里の駿馬は容易に見付かるものでは御座いませんけれども死んだ馬の骨ですら五百金を以てお買上になると聞いたなれば生きた馬なれば必ず高價にお買ひ上げになるだらふと今に賣りに來るものも御座いませうから何うか夫れをお待ち願ひまする」と言上したので國王も不滿足の内に強てもお咎めが無かつたが、果して夫れから一年經たぬ内に千里の馬が三つまでも集まつたと申すことも御座いますから、主上にも賢士をお望みと御座いますれば先づ隗よりお始め下さりますやう、さすれば某しより勝つたものが吃度集つて參るで御座いませう」と言上に及んだ處から、昭王も或程と云ふので俄かに郭隗に立派な邸を與へるやらいろ〳〵と優遇をすると、夫れと聞き傳へた賢士は諸方から集つて昭王に仕へることゝなり、終に其力によつて齊に對し昭王の望みを達することが出來た、そこで優れたものを用ひやうとするには先づ

劣つたものを用ひるがよいと云ふことを「先づ隗より始めよ」と云ふことになつたのである。

五月十一日

■孺子教ふべし……（十八史略）

漢の張良がまだ少年の時、一日下邳縣の土橋の上を通りかゝると馬に乘つた白髮の老人が來かゝつたが何うした拍子か足にして居つた履を橋の下へ落した、行こふとする張良を見て「アコレ〳〵、お前此處を下りて彼の履を取つて來い」と横柄に云ふたものだから張良は「なーに失敬な奴ミミミ」とムッとはしたものゝ見れは老人のことではあり氣の毒なと云ふやうな感じを抱いて云はれるまゝに拾つて持つてくると「コラ〳〵拾つて履かせぬ奴があるか、馬鹿め、早く履かせろ」

如何に老人でも隨分傲慢な人もあつたものだ、が併し後來事を成すほどの張良

だからジッと堪へて云ふがまゝに穩しく履せると老人はニタリと笑つて「孺子教ゆべし、今日から五日の後に今一度是れへ來い」と云ひすてゝ立ち去つて仕舞つた、其有樣に張良は訝かしく思ひながら五日の後、約束によつて其處へ行つて見ると老人は既に其場に居つて「馬鹿ッ人に教へを受けるに後れて來る奴があるが、今五日後に出直して來い」と云ふたまゝプイッと立ち去つたから仕方が無い、斯ふなると張良も聊か意地も手傳ふたものと見ゐて又もや五日の後に行くと其日も老人が早くて又もや叱られる。更らに出直す同じく後れたと云ふ風で再三再四繰り返した後、遂には「何うも可訝しい老爺だ、今度は寧そ夜半から出掛けて見やふ」と夜の明けぬ内から出掛けて見ると漸くのことに老人より早かつた、後からやつて來た老人は張良の既に來て居るのを見てニタリと笑ひ、軈て一卷の書物を取り出して張良に與ゐたのは大公望の兵書であつたから、張良は是れによつて怠らず勉強した末、後に漢の高祖に仕へ留候に封せら

れることゝなつた。

此の孺子教ゆべしの語は汝に教へたなれば行末は見込があると云ふ意味だが、此の語よりも寧ろ學びたいのは張良の耐忍力である、大抵のものなれば見も知らぬ老人から履を拾へ、履を履せろなんかと云はれて誰だ諸々と其命に從ふものではない「なんだ此老爺、此奴狂人か知らん」と横を向くだけなればまだしも、氣の短かいものなれば「此奴失敬な奴ッ」と馬から引ッ張り下して頭の一つくらい打つておつたかも知れないが、夫れでは張良のやうな出世が出來なんだであらふ。

五月十二日

■靜を主とすれば動も吉なり……（陸宣公）

「何うだ君、是れから海水浴に行かないか」「そうだな、行くは行くが併し君は泳ぐことは出來るか」「ウフッ、馬鹿にするな、僕は水泳場の教師までやつたこ

とのあるのを君は知らんことはあるまい」「アハッ、そうだな、それじや行かふ」「處で君は泳ぐことを知つて居るのか」「いや僕が知つて居るくらいなれば別段君の伎倆を聞く必要が無いのだが、知らんから萬一の時には君に縋らふと思つて尋ねたのさ」「ハヽヽ、マアヽよい、よしッ、其点なれば僕が引き受けたから夫れでは行かふ」と云ふので甲なる人が乙なる人に誘はれて海水浴場とする濱邊へ出掛けて行つた、處が乙は泳ぎにかけては得意なものだから遙か沖の方へ悠然と泳いで行つては濱邊へ引ッ返し、濱邊へ引ッ返してはまた沖の方へ愉快氣に泳いで行くに引き代へ、甲はと見れば漸く足の甲が沒するくらいの深さの處でチャブヽヽやつて居る樣子に、フイと其樣を見た乙は「やア甲君、そんな處に居つては一向面白くもあるまい、モット此方へ來給へ」「いやそりや不可ん、君は泳ぎを知つて居るからよいが、僕はテンで水心が無いのだものミミミ」「なーに、心配し給ふな、萬一の時は僕が引き受ける、大体態々海

水浴に出掛けて來て足の爪先だけ潮につけて何んになるものか、全身を浸さなくてはミミミ」「フム、それもそうだな、それでは今少し深味へ行くから萬一の時は助けてくれ給へ」と云ふので怖々進んだのは腰切りくらいの深さのところで、軈て腰を屈めて肩の邊まで水に沒し「なア君、是れで全身を浸すことになるから態々來たゞけの價値はあるだらふ」と云ふのは靜を主とするもので、萬事是れくらいに用心をして居れば決して間違ひは無いが、乙のやうに已れの腕に甘んじて動を主としてはエテシテ取り返しのつかぬ失敗のあるものである。

五月十三日

▣智者も常に智なること能はず……（老プリニー）

弘法も筆の過り、猿も樹から落ちる、智者も千慮の一失なんかと云ふ諺は昔から云ひ傳へられて居る處だ、何れほど伎倆のあるものも時には失敗を演ずることがある、前章に述べた水泳自慢の乙のやうなものでも決して油斷は出來無い

然も其失敗と云ふのは約まり慢心から起るものであるから、何事に抱はらず自分が出來るからと云ふて決して慢心してはならぬ。

五月十四日

▣罪を天に得ば禱る所なし……（孔　子）

罪を天に得ると云ふのは、天理に悖つた行ひをすることである、世に苦しい時の神頼みを云ふことがある通り、常は神は何處に居るか佛ば何んなものやら糞でも喰へと云ふて居るやうな人間でも、航海中に大難風に出逢ひ、今にも船が沈沒でもしやうと云ふ場合には「南無金比羅大權現」とか何んとか稱名を唱へるものだそうだが、それは甚だ勝手千萬な話で、如何な金比羅大權現でも滅多に助けてくれる筈は無い、早い話が泥棒をした奴が警察へ捕へられて警察官に何うかお許し戴きたいと頼んでも夫れでも許してやると云ふ警察官はあるまい否や話は横道へ外れて仕舞つたが、昔から天は禹般を支配するものとしてある

そこで身に不幸あるこか、何か願ひ事があれば誠意を以て天に禱れば叶へてくれるものとしてあるけれごも、天の掟、所謂誠道に悖いたものが天に禱つて罪の赦しを受けやうごしても恰ご泥棒が警察官に赦してくれご云ふやうなもので何うして赦されやう、さすれば天の外に禱る處は外にあるかご云へば、萬般を支配する天を措て、夫れ以上權威の持つたものが無いから、他に求める處が無い筈である。

五月十五日

■身を樂しましめば心を苦しむ……（古　諺）

人間の一身に眞實の樂しみご云ふことは求め得られるものでは無い、樂は苦の種、苦は樂の種ご云ふことはあるけれごも、種では無く現實に於て既に苦ご樂が岐れてあるものだ、譬へで云へば名所舊蹟を探つて目を樂しませる代りに足を苦しめる、旨いものを喰つて舌三寸を樂しませる代りに口を働かさねばな

無い、上等の着物を着て氣を樂しませる一方では、もしや汚しては不可無い、電車の乘り降りに引き裂いては大變ご氣を使ふ、立流な住居を搆へ、珍器を藏して居れば樂しいには違ひはあるまいが、萬一火事に出逢つてはご心配をせねばならぬ、澤山な財産があれば是れも樂しいものだらふが、自分の家に置けば泥棒の心配がある、銀行に預ければ銀行に破碇の恐れが無いごも云へない、株券を買ひ込めば何時相場が下落せぬごも限らぬ、ご斯ふ思ふては氣が氣ではあるまい、其他萬般の事、凡て此んな風に考へてゆけば樂しみの裡面には必ず苦しみの附き添ふものであるから樂みのみを望むことは到底出來得るものでは無い。

五月十六日

■借金は自由を化して奴隷となす……（ウエリントン）

金で面を毆るこ云ふが、實際金の勢力も中々馬鹿にはならぬ、人の自由を束

縛するのは借金だけでは無く、今度の大浦内相の引退事件のやうに借金以外の金の力でも高位高官の大臣すら進退を決する大事件を惹起すくらいだ、況して借金の爲めには義理が重なり、遂には債權者の前に頭も上らず手も足も出ないやうなことになる、尤も茲に云ふ借金なるものは強ち金錢上のことばかり云ふたものではあるまいと思ふ、否、ウエリントンの氣では仮令金錢のみに云ふたにした處で凡ての方面に解釋してもよい、其一斑として、早い例をあげて見ると、他人から受けた恩義であるが此の恩義の借金は中々に重いものである、金錢の借金は借りただけ支拂へば濟むけれども恩義の借錢は一生拭ふことは出來無いものである。

五月十七日

■一狐裘三十年豚肩豆を掩はず……（十八史略）

世に節儉と云ふことゝ吝嗇と云ふことを混合したり、取り違へて居る人が隨分

あるやうだが節儉と吝嗇は似て非なるもので然も其非は反比例に開いておる、一は無駄遣ひを節する俗にシマツと云ふ方で處世の道には尊重すべきことであるけれども一は所謂ケチンボと云ふやつで他人のものでも叩き落して自分の所得にしやうとする最も忌むべき惡竦なやり方である、此語は其節儉家の手本として見るべきもので、齋の宰相に晏子と云ふ人があつた、宰相と云へば總理大臣と云ふくらいの身分だから、俸給も隨分と澤山あつたらふに、此の晏子と云ふ人は一つの狐の皮ごろも（裘とは皮ごろものこと）を三十年を用ひたり、祭に供へる豚の肩の肉を豆と云ふ器に盛るのに其肉がホンの僅かばかりだから器の中にションボリあるだけで器を掩ふに至らなかつたが、其一面では慈善の心が中々に厚く、此の晏子のお蔭で養はれて居つた齊の士が七十家にも餘つたそうである、約まり裘は使用に絶にるまで使ひ、供へものは澤山した處で結局は棄てゝ仕舞はねばならぬものであるから心だけのものを供へて無駄な費を省き

夫れを有用な方面に廻して社會の爲めを計つて居つたもので是れこそ眞實の節儉と云ふてもよい。

是れとよく似た話が著者の見聞したうちに一つあるから序ながら記して見る、先年物故されたが日本聖公會の監督として米國から派遣されたウイリヤムスと云ふ人が京都に居つた、既に老年に及んだ處から本職を退き、老監督と呼ばれて居つたけれども基督教の爲めには中々熱心に盡して終生傳導の爲めに一身を棒げたほどの人だ。

此のウイリヤムスと云ふ人も節儉にかけては妻子を凌がふと云ふほどの人で、身分が身分だから傳導館の方からは尠からぬ支給を受けて居つたらふに、無駄費ひと云ふことは金輪際無かつた、汽車へ乘るのにも何日も赤切符を買ふ、偶ま是れを見かねた人が自か青いのを買ふて其列車へ導かふとすると突ッ返さぬまでも「此んなことは今後廢して下さい、御好意は有り難いが一等でも三等で

も行先は同じことですから」と云ふので其切符を持つたまゝ平氣で三等の列車へ乘り込む、驛員が見兼て切符而の列車に案内をしやうとすると「私は一等や二等は好きませぬから此切符で此所に乘つて居つても差支へが無ければ此儘で置いて下さい」だから手が付けられない。

是れだけなれば何も節儉と云ふことは出來ないが、此人の洋服と云へば何時も七ツ下りとも云ふほどのものを着用して居つた、洋袴の脛は禱祈の時に跪づくものだから磨り破れたのを糸で綴られて居る、腕のカフス釦は紙捻で間に合して居る、靴足袋はと云へば是れも綴くつたものを平氣で履き、手に提げた鞄は是れも御多分に洩れぬボロ〳〵のものを矢ッ張り綴くつて居る有樣で知らぬものゝ目には西洋の乞食とも見るのは強ち惡口とも思はれほどだつた。

然も此の洋袴、靴足袋、鞄なんかの綴りは悉く召し使ひの厨夫に命じるのだから厨夫に於ても不平が出ずには居られない「ばッ、馬麗〳〵しい、外國人と云

へば隨分と金の切れ放れがよいものだのに、此處の老爺ほど吝ん坊があつたものぢや無い、老監督とか何んとか豪そうに云ふて居るが、靴足袋一足すら減多に買はぬ剩さへ古い奴を俺れに洗つて繕くれなぞとはアンマリ馬鹿にして居る俺ァ大体云へば此處へ厨夫として來て居るのだから食物さへ滿足にして居れば夫れでよい筈だ」と云ふやうなことから遂には暇を取らふとするとウイリヤムスは其理由を尋ねる、尋ねられては眞逆夫れとは云ひ惡ひと見ゐて「いや何うも身体が工合が惡い」とか「家内が何うだ」とか宜い加減な口實を設ると、中々何うして夫れくらいで暇を出そうとは云はない「そりや不可ない、私の家へ來て病氣になつたからと云ふて暇を出すやうな不人情なことは出來ません、病氣なれば仕方が無いから私の方から醫者を求めてあげやふ、また家内の都合が惡ければ夫れも心配には及ばぬ、私の方へ任しておきなさい」と云ふやうな調子で中々に許してくれぬものだからツイ〳〵一年二年と辛抱をしたが、何日ま

で經つても給料の上る樣子も無く、殊に萬事に儉やかな主人のことだけに俗に云ふ落翻れなぞは一文も無い處から愈よ愛想を盡してある日强て暇を申し入れた、とするとウイリヤムスは殘念そうに「私の方では何日までも居て貰いたいが、お前さんの都合上、左程まで云ふのなれば仕方がないから望み通り暇は上げませう、併し夫れに就いてお前さんに渡さねばならぬものがあるから暫らくお待ちなさ」いとプイツと其場を外したので厨夫は何氣無く待つて居ると、稍あつて立ち出でたウイリヤムスの手には一本の太やかな竹の筒を重そうに持つて來て卓子の上へドサリと置き「是れは兼々お前さんから預つたものだから何うか持ち歸つて貰ひたい」と云ふ言葉に此方は一向に判らぬ「とツとんでも無い、此んなものをお預けした覺ゑがミミミ」「イヤ〳〵、私しが確に預かつた覺ゑがある、それでは私が開けてあげやう」と一方の節をポンと拔いて逆さに振るとザラ〳〵と流れるやうに飛び出したのは澤山な銅貨、銀貨、紙幣等取り

雑へて堆く其前に積んだから二度吃驚「これはミミミ」と果れる顔を見てニタリと笑つたウイリヤムスは「ナニ、是れはお前さんに洋服、靴足袋なんかを繕つて貰ふごとに新しいものを買つたと思ふて夫れだけの代金を入れておいたのだが、買へば是れだけの金子が無くなつて居るものとして見るとのお前さんの爲めに殘つたのぢや、取りも直さずお前さんの手に入るべき金子だから遠慮無く納めておくが宜しい」と云ふ言葉に厨夫も今更らながら愧しく思ふて自分の心の至らなかつたのを懺悔し、改めて引き續き仕へることになつたそうである、尤も是れは事實談で、其他此のウイリヤムスと云ふ人の言行に就て傳ひたいことは澤山あるが餘り長くなるから他日何かの機會を待つて述べることゝする。

五月十八日

■人は天より賜ふにあらざれば受くること能はず……（キリスト）

天より賜ふとは正當の道を踏んで我が手へ受け納めることである、約まり不正

なものを受けてはならぬと云ふ意味だ、早い例が選擧法違反なんかで繩目に掛つた人々なぞは云ふ迄も無く天より賜はらぬものを受け或ひは授けやうとしたからである。

五月十九日

■今更らに何を惜まん大夫の、素より君に捧げぬる身は（平野國臣）

平野國臣は有名な憂國の志士である、一身を賭して勤王の爲めに捧げた勇ましい事蹟は歴史に傳ひて居るが、此の歌は實に國臣が肺肝を碎いて讀んだ歌である、世の歌詠と云ふ連中には心にも無いことを筆先で誤魔化して三十一文字に並べろ、いや歌詠に限らぬ、言葉を以て人前を繕ひ、所謂言行の一致せぬものが隨分とある、そんな人間に限つて忠君愛國なぞと云ふ念は藥にしたくもあるべき筈は無い、慨かはしいことだ、そんな人間に此の歌を嚙んでくゝめて頭から注射をしてやりたい、我國に生れたものは誰れしも等しく此の歌のやうな氣

慨を持つて居りたいものである。

五月二十日

■おもしろの好色や身を亡さぬほど……（小早川隆景）

好色と云ふと何んだか變に聞こるが是れは獨り女色をのみ云ふたものでは無いが人には嗜好と云ふことがある、其嗜好も過ぐれば身を亡ぼすの種となるから宜い加減にしておがねばならぬと云ふ戒である、現に和漢を問はず昔から女色で國を亡ふたものもあれば、酒の爲めに生命を失ふたものもある、其他碁、將棋を初め樣々な嗜好の爲めに身を誤り機會を失して取り返しのつかぬことになつた例は尠くは無いから嗜好も或程度に止めておかねばならぬ。

五月二十一日

■必要は發明の母なり……（西　哲）

眞實其通りである、需用と供給の伴ふのは經濟學の原則の通り、世の發明と云ふことは何れも必要に迫られて起るものである、若しも必要の無い發明物が出來た處で世の中には誰れ一人歡迎するものが無く、切角の發明した苦心も何等の功も無い譯である。

五月二十二日

■何事もおづるなく、おづれば仕損ふぞ、おづるは平生のこと
　場へ出てはおづるなく、溝をばづんと飛べ、危ふしと思へば
　はまるぞ……（澤庵禪師）

「おづろ」は怖けのこと、場へ出ては」は其場に望んでのことである、其場に望んでは決斷力が無くてはならない、決斷力無く、思ひ切りが無くてオヅくして居ろやうでは反つて災害が來ると說いたものだが、遺がに稀代の名僧と云はれた澤庵禪師である、此語によつて決斷力の乏しいものゝ腑甲斐ないことを喝破して居ると云ふてもよい。

五月二十三日

■愚人の財を貧ぼること蛾の火に赴くが如し……（事文類聚）

蛾と云ふものは俗に火取虫と云ふて夏から初秋の夜、自ら火へ飛び込んで焼け死んで仕舞ふ虫であるが、慾に目がくれて後先の考へも無いものは此の蛾が火を見て飛び込むやうに、金を見て無暗と慾心を萌すものだから自分の手に入つたところが大變な失敗をして再ひ浮む瀬の無いやうなことにもなる。

五月二十四日

■樂しみは貧しきにあり梅の花……（左甚五郎）

詠んだ主が樂天的に一生を終ゐた甚五郎の句だからと云ふて馬鹿にして仕舞つては不可ない、此句こそ眞實の眞理だ、と云ふて今日喰ふ米も無いやうな赤貧に甘んぜよと云ふのでは無いから取り違へては困る、約まる處は只だ其分に安んじて餘財を求めやうと思ふては不可ぬと云ふことで、小人玉を抱いて咎あり

と云ふ諺の通り、身分不相應な金のあるものは一見氣樂に見ゐて反つて苦の絶ゐ間が無いものだが、仮令其日暮しであらふとも自分の職業を勵んで衣食住に不足が無く、他人に迷惑もかけないで暮して居る方が何れほど樂しいかも知れぬと解譯をすれば間違ひが無からふ。

五月二十五日

■財嚢の滿ちし女は鼻持がならぬ……（ジユベナル）

財農の滿ちし女……は早く云へば虚榮心に富んだ女と見れば間違ひは無からふ女は女らしく愼しんで居つてこそ女としての價値はあるが、髪は變テコな髷に結ひ、金椽眼鏡を鼻先に引ッ掛けて頭からベールを被り、襟から金鎖を垂れて両の指にはピカリ〳〵と光る石入りの指環を篏め、是れ見てくれがしにベナリシャラリと練つて行く樣と云へば實以て鼻持のならぬものである。

五月二十六日

■吾日に三たび我身を省み、人の爲めに謀りて忠ならざりしか、朋友と交りて信ならざりしか、傳へられて習はざりしか（曾子）

曾子の三省とは是れである、人の爲めに謀りて忠ならざりしかとは人に誠意を盡したかと云ふこと、朋友と交はりて信ならざりしかとは友達に僞を云はなんだか、迷惑をかけなんだかと云ふこと、傳へられて習はざりしかとは物を敎へられて自分の心の内へよく釐み込んで忘れはして居ないかとの事である、誰れしも是れだけのことを毎日考へて居れば間違ひはあるまい。

五月二十七日

■常に我身を省みて先づ我が過ちを知るべし、過を知りなば速かに改むべし……（貝原益軒）

前章には曾子の三省を述べたが、我身を省みただけでは仕方が無い、我身を省みただけでは仕方が無い、我身を省みて過があれば是れを改めねばならない、

そこで貝原益軒は過を改めることに云ふことに就て斯ふ述べたのである。

五月二十八日

■始めあざることなく、克く終あること鮮し……（詩　經）

始あれば終も無ければならぬ筈を終鮮なしと云ふのは一寸可訝しく思はれるが此の語は人事に就て云ふたもので、人の性は善として造られたものである、だから人の一生は善を以て終らねばならぬ筈を、天の道に背いて惡事をなし、天命を全ふすることが鮮いやうなことをすると云ふやうな意味である。

五月二十九日

■爾の榮に矜る勿れ、天道は盈つるを惡む……（文　選）

矜るは傲ろを意味する、世に盈つれば欽くろと云ふ諺があるが、人は得意の境遇になれば必ず誇り傲りたがるものだ、其傲る時は既に盈ちた時であるで人間の運も斯ふなれば最早頂上である、だから此上は所謂欽けるで下り坂になる一

方だから如何に得意の時代であらふとも慢り傲るやうなことがあつてはならない。

五月三十日

■仰の終る時は終る時に終るにあらず……（エマルソン）

生命の無くなるのは無くなる時に起つたものでは無く其原因は前々からある筈だ、卒中で遽かに亡くなるものも其原因を探ねたなれば平素から酒が過きたからである、であれば其他の急病と云ふた處で平日から不攝生、不養生等の結果が來たのに外ならぬ、早い話が物を買ふのに常々から現金拂ひをやつて居れば月末に何處からも請求書を持つて來るものも無いが、平素から掛け買にして居れば請求書も持つて來れば集金に來るものもあるのと同じことである。

五月三十一日

■大金を貸せば敵をつくる……（西　哲）

大金は強ち莫大な金子と云ふ意味では無い、借主にとつて身分不相應な金子のことと、早く云へば返せる見込の無い金のことである、返せる見込の無いものに金を貸せば何の道容易に返濟に來る筈が無いから結局は赤目を釣りあつて不和となるのは當然のことだ。

六月一日

■一錢輕しと雖も是を積まば以て貧人をして富しむべし、一日短しとするも之れを累ぬれば以て一世を終るべし、世に寸陰を惜む人尠きは實に嘆すべし……（卜部兼好）

積んで山を成すのは獨り蘢だけでは無い、一個の錢も疎かに出來ねば仮令一分の時刻も自分の壽命の幾分の端だと思へば是れも大切にせねばならぬ、處が世には金を費つて大切な時間を遊んで居るものがある、是れ等は實以て馬鹿の骨頂と云はねばなるまい。

六月二日

■軒に巣を張りたる蜘蛛を地上に落せば足を収め石の如くなりて死を逃れんことを計る、彼は小智にして人を計らんとするなり少しなりとも走り逃るればその程も命存すべし、彼は人は知らじと思ふならんも、彼れの謀計は人よく知れり、無智の人、有智の人を計ること蜘蛛の謀計に同じ、笑ふべし……（澤庵禪師）

世の中には、此の蜘蛛の愚を學ぶものが隨分と尠く無い、澤庵禪師なればこそ笑ふことは出來るが我れ〳〵に入に愼しまねばならぬ。

六月三日

■自ら勞して自ら食ふは人生獨立の本源……（福澤諭吉）

何日までも親の脛を嚙つて居るやうでは到底獨立の出來得べきものでは無い。

六月四日

■羅馬は世界を征伏し、富は羅馬を征伏せり……（ペトラーク）

驕る平家は久しからずと云ふのと同じやうな意味である、羅馬は一時世界の強國と云ふので是れに刃向ふ敵が無かつた、獨り兵力ばかりでは無く富力に於ても又世界を壓するばかりであつたから上下を通じて華美に流れる、從つて人心も墮弱となつて遂には滅亡を見るやうなことになつたのである。

六月五日

■明日成すべきことは今日是れを成すべし……（ヤング）

誰れしも五月蠅く思ふ時は「今日は嫌だから明日にする」とよく云ひたがるものだが、此の明日と云ふやつは甚だ宜しく無い、物事に成るべく繰りあげて處理の出來るだけ方付けておかねば、明日までに何んな急ぎの用件が出來るやも判ら無い、若し急ぎの用件が出來たなれば明日と云ふ豫定が狂ふて明後日になり、明後日は更らに其翌日になり遂には日が經つて忘れて仕舞ふか嫌氣がさし

て行ふことも出來ぬやうになつて仕舞ふ、古歌に「明日ありと、思ふ心の仇櫻夜半に嵐の吹かぬものかは」とあるも是れだ。

六月六日

■一人儉を知れば一家富み、王者儉を知れば天下富む…(譚子化書)

誰れしも目上のことを見習ひ易いものだから、一家の主人が儉約をすれば家内一同は知らず識らずの間に是れに倣つて儉約をするやうになり、一國の君主が儉約をすれば其國民は一般に蓄財をするやうになる、茲に例を引くのは誠に畏れ多い話ではあるが、先帝陛下御在世の節、彼の戊申の詔勅を御發表になられて以來、勤儉貯蓄の聲が全國に遽かに八釜しくなつて郵便貯金の金額が急に增加したのも取りも直さず此語の通りである。

六月七日

■學びて思はざれば則ち罔し、思ふて學ばざれば則ち殆し(論語)

切角學を修めた處で、智識の根底を固めてゐないやうでは何んにもならない、また徒らに空想に耽つて居るばかりで學問の素養が無ければ物事の筋道が判らぬから恰と砂の上に建てた家と同じことで基礎の定まるものでは無い。

六月八日

■老いたりとも學び得ざるの理なし……(獨逸俚諺)

我國の人は「乃公は最早歳を老つたから駄目だ」と云ふことをよく云ふが、學問には年の長幼は無い、世に八十の手習ひと云ふ通り、小野道風は老年に及んで讀み書きの稽古を初め、遂には書道を以て天下に名を成すに至つた、今は我國がら見ると敵國だから賞めたくは無いが、此語は獨逸の俚諺として傳へられておるもので、獨逸が科學的智識の進歩して居るのも、今度のやうに聯合軍の强敵を引き受けて立派に奮鬪することの出事るのも云はゞ此んな俚諺から知らず識らずの内に素養を拵へたものと見ゐる。

六月九日

■日々善を行つて休まず、小善と雖も廢せざれば一日十二時の功あり、一月三十日の功あり、一年三百六十六日の功あり、其積累の至り、高大測り知るべからず、須らく善を樂んで倦むこと勿るべし……（貝原益軒）

十二時とは一日のことである、現今は二十四時になつて居るが昔は子の刻、丑の刻、寅の刻と云ふやうに十二支の干支によつて時をわけて居つたから十二時より無かつた、そこで仮令僅かなりとも善事をすれば一日だけ世の爲めにもなり自分の心も愉快を感じるものである、更らに進んで是れを一ケ月、即ち三十日續けたなれば其事が愈よ大きく、一年なれば三百六十六度に及び、夫れが尙も積み累ぬれば實に量り知られぬほどの手柄をたてることゝなる。

六月十日

■公道達して私門寒り、公義立つて、私事息む……（韓詩外傳）

何事でも私心と云ふのはよく無いものだ、殊に官吏、或は會社の事務員や、主人持の身分として尙更ら宜しく無い、私心があるから收賄問題が起る、遂に縲紲の憂目を見ねばならぬと云ふことになるが其起りと云へば公道が達せんからだ、自分さへ超然として公明にやつて居れば仮令賄賂を持つて行かふとするものがあつても容易に持つて行けるものでは無い、昔し天滿騷きで名高い大鹽平八郎が大阪の天滿與力であつた頃、隨分と上役人の間には賄賂の行はれたものである、處が或町人が公事の爭ひから平八郎の邸へ尠からぬ贈物を持つて行つた何う突き返しても強てと云ふものだから平八郎も夫れではと收めた、收めて夫れ切りなれば平八郎も收賄の罪は免れぬが平八郎は何うして〳〵黃白の爲めに眼の晦むやうな人で無かつたから其翌日役所へ出ると其町人と相手方のものとを白洲に呼び出す、白洲は現今で云ふ法廷だ、白い砂利を布いてあつた

から白洲と云ふたか茲には其處まで詮索する必要は無い、兎も角も白洲へ呼び出された双方の内でも、昨日平八郎の邸へ賄賂を持つて行つた奴は平八郎が無事に受け収めてくれたから自分の思惑通り勝公事になるに相違は無い、彼れだけのものを持つて行けば如何な大塩さんも義理からでも自分に味方をしてくれるだらふと自分勝手な理屈を付けて恐れ入つて居る内にも得意の色がほのめいて居ると平八郎は双方をグッと見下し、軈て其町人に向ひ「やア、何の何某、昨日は多大の贈物有り難い、切角だから彼の品は貰つてはおくが此度の公事は最早取調べるまでも無く其方の負である、何故と申すに自分が正道を踏んでおるものなれば上役人の邸宅へ殊更ら音物を持參致して頼み越すべき筈はあるまい、上役人は公明であるぞ、音物の如何によつて公け事を左右致すと思ふか、馬鹿ッ」の一言で忽ち裁断がついた、すると此の評判は間も無く大阪の町中へ擴がつたものだから「何うも大塩様は豪い人だ、今後は大塩様のお邸へ迂濶に

賄賂を持つて行つては大變だ」と云ふやうなことから所謂公道達して私門塞がつたといふことである。

六月十一日

■衣は新しきに如くはなく、人は故きに若くはなし……（晏子春秋）

人の故きと云ふことに就て二種に解釋をすることが出來る、一つは年長者、即ち自分より目上の人のこと、また一つは長く交りを結んで居る友人のことだが何方に取つても差支へはあるまい、目上の人に從つて居れば間違ひは無く、長く交りを結んで居る友達なれば互ひに氣心が判つて居るから是れも自分の爲めには不利益を釀すやうなことをせぬ筈だ。

六月十二日

■人を譽むるの言は太だ溢るべからず、人を責むるの言は太た盡すべからず、一時意を暢べずとも後復悔心あり、吝嗇の妙、知

らざるべからず……（石夫臺）

溢るは過ぎるの意、咎嗇の妙は充分に云ひ切らぬ内に趣きのあること、此語の意味は人を譽めるにしても餘りに譽め過ぎては媚るに當つて譽められるものは反つて快く思はぬものである、また人の失体を責めるにしても宜い加減にやつておけは「成程、是りや悪かつた」と悔悟するものだが、餘りに深く追及をすると遂には焦氣氣味となつて「ちよッ、勝手にしろッ」と斯ふ出たがるものである、尤も是れは直接其當事者間のことだが、夫れと變つて友人に忠告をするにしても同様で「君、彼んなことをやつては不可んぢや無いか、少しは慎しみ給へ」「イヤ、眞實僕が悪かつた、ナニ、僕は本心でやる氣では無かつたのだが、ッィ少し飲み過きておつたものだから誠に濟まん」で濟むが、是れを今一つ突ッ込んで「實以て怪しからん話だ、何うも君のやうなことをやつては我れ〳〵友人の体面にも關はる」と迄云ふと、相手が少し虫の居處でも悪ければ「何んだ、体面に拘はる、よしッ、夫れなれば絶交し給へ」と云ふやうなことになつては切角の忠告も何等の功無く剩さへ、双方の不和を生じるやうなことゝなる。

六月十三日

■蓬麻中に生ずれば扶けずして直し……（荀子）

蓬と云ふ草は隨分横に枝の張りたがるものだが、夫れでも直な麻の中に生へたものは自然に眞ッ直に延びるものである、人に於ても其通りで兇悪なものでも善良な友達の間に交つて居れば夫れに感化されて自然に善良になるものであると云ふ意味である。

六月十四日

■世に處しては必ずしも功を邀めざれ、過なき是れ功なり（菜根譚）

人は功を遂げやうと逸るから失敗をする、實業家は金子を儲けやうと焦氣るか

ら思はぬ損失をすることがある、夫れよりも自重して過ちの無きやう、損をせぬやうと氣を付けて事に從ふて居れば何日か功も遂げることも出來、金も儲かるものである。

六月十五日

■己れを知れ……（古　諺）

誰れも己れを知らぬものは無いが、さて己れの本分を知るものが尠いから失敗も出來る、人には功名心もあれば慾望もある、夫れが爲めに己れの本分を忘れて望外の望みを抱くからよく無い、五尺の体軀を以て十尺の高きにあるものを取らふとするのは己れを知らぬものゝ處爲で其愚や嗤ふべしである。

六月十六日

■名を爭ふ者は朝に於てし、利を爭ふものは市に於てす（史　記）

朝は朝廷、市は市井のこと、名利双び得られるものでは無い、そこで名を得んとするものは朝廷に仕へて役に就くべし、金を欲むものは商賣人になり下つて算盤を彈くべしと云ふのだが、近頃は役に就いて更らに金を欲こするものが隨分とあるから一方では瀆職事件なんかゞ喧ましく起ることゝなる。

六月十七日

■天の將に大任を是人に降さんとするや、必ず先ず其心を苦め、其筋骨を勞し、其體膚を飢やし、其身を空乏し、其爲す處を拂乱するは心を動かし、性を忍び、其よくせざるところを增益する所以なり……（孟　子）

世に逆境だとか不遇だとか薄命だとか何んとか泣言を言ふものはあるが、是れは抑も大變な間違ひである、物窮まれば通ずと云ふ通り、人は此の逆境とか不遇とか云ふ時には其裡面に近く一道の光明が閃いて居ることを思はねばならぬ人を使ふのに其者の性質得意長短等を調べるのと同樣、自分の苦境も、天が自

分に大任を下そうこする爲めに試驗されて居るものこ思ふて耐ね忍んで居れば軈て陽々たる曙光に接することが出來るのである、處が薄志弱行のものは是れを忍ぶたけの氣力が無く「俺れは最早駄目だ、斯ふなつては再び社會に頭をあげることは出來無い」なんかこ弱い音を吹き、遂には厭世こ云ふやうなこゝなる、約まり天の試驗に落第するこゝなる譯だ。

六月十八日

■金と灰吹は溜るほど汚い……（俚　諺）

如何にも其通りだ、其内にも灰吹の汚いのは掃除をすれば潔しくなるが、蓄財家の汚いのは鼻持のならぬものである、義理を忘れ、人情を忘れ、社會に害毒を流し、只だ我利〳〵主義に凝り固まつて仕舞ふものである、こ云ふて金を貯めて惡いこ云ふのでは無い、只だ正當に潔しく溜めたいものである。

六月十九日

■人心の同じからざる其面の如し……（左氏傳）

十人十種こ云ふことがある通り、人の性質は各人各樣に異つて居るのは恰ご其顔が何百何千の人が悉く異つて居るのこ同樣である。

六月二十日

■天は自ら助くる人を助く……（自助論）

稼ぐに追つ付く貧乏なしこ云ふ俚諺こ同じやうな意味である。

六月二十一日

■君子は已れを省みる……（伊藤東涯）

君子は常に已を省みて事に當るから過ちは無い、誰れ人も君子を手本こして已を省みて居れば間違ひの無い筈だが、何うも自己本意になりたがるのは人間の弱点だ。

六月二十二日

■小人窮すれば斯に濫す……（論　語）

小人は品性の下劣なもの、云ひ換へれば修養の足らぬものゝことである、品性の卑い、修養の足らぬものは身が困つてくると善く無いことを企みたがるものだが、此の語の語源に就いて斯んな話がある。

孔子が陣、蔡の境に居つた頃のことである、楚の國から孔子を迎へやうと云ふ噂が陳蔡の両國に傳はつたので、両國の太夫は非常に驚いて「是りや大變である、孔子が楚の國に仕官をするやうなことになつては此方が危い」と云ふので孔子をば廣野へ引ッ張り出し、双方から兵を出して其四方を嚴しく取り圍んだそれが爲め孔子の方では糧食の途も絶にて何うすることも出來無い、けれども度量の大きい孔子はそんなことは尠しも苦にせず相も變らず門人等に向つて平氣で講義をやつて居つたが、困つたのは門人だ、何んぼ講義を聽いた處で腹が空いては何うも仕方が無い、と云ふて先生の孔子は別段不平の色も見にぬもの

だから遏がに口へ出して云ひかねて居ると、門人中で氣の短い豪傑肌の子路は遂に辛抱しかねたと見ねて孔子に向ひ「先生、君子も窮することがありますか」と尋ねた、此の心は君子とも云はれる人なれば世の中に困りそうな筈はありますまい、夫れに先生は君子だのに何故斯ふ困るやうなことになつたのですと云はんばかりに云ふたのである、とすると孔子は「フム、如何にも、君子固より窮す、小人は窮すれば斯に濫す」と云はれた、濫は乱に通じる、即ち君子は窮しても成行に任すが、小人は窮すると無茶なことをやるものであると子路が今にも乱暴のやりかねん有様を見て暗に戒しめたのである。

六月二十三日

■憂きことの猶此上に積れかし、限ある身の力ためさん（熊澤蕃山）

男子事に當る宜しく是れくらいの氣慨を持つて居らねばならぬ、僅かな試驗問題を苦にして青くなる學生や、區々たる事業の蹉躓に氣を腐らす事業家は蕃山

の名を紙に書いて守り札ごでもしておくがよからふ。

六月二十四日

■最も困難なりしことは尤も記憶す……（コルトル）

是れは誰れしも同じこゝ丶見ゐる、著者なんかも小學校時代に解決に苦しみ、教師に再三叱責された問題は二十年三十年後の今日でもまだ目前に浮んで居る夫れから十數年以前、旅行をして嶮路に苦しんだ道は今尙忘れるこゝは出來無い、其代り平々凡々のこゝは數日前ぢや無い、昨日のこゝも兎もするこ忘れるこゝはあるが、是れから見るこ人間は諸方面に亙つて困難に遭遇すべしである遭遇して時に其困難を想ひ起し以て起居の戒めこすべきである。

六月二十五日

■涼しさに大福帳を枕かな……（一　茶）

大福帳こ云へば商家では最も大切にすべきものであるけれごも、僅か一時の快

を得ん爲めに是れを枕にする處は人間の眞情だ、いや、是れは大福帳に限らぬ重く川ひられて居る人間だつて時には上官の爲めには枕にされるこゝがあるものだが、是れは時によつては忍はねばならない。

六月二十六日

■道端の木槿は馬に喰はれけり……（芭　蕉）

俳句序に今一つ俳句を挿んだ、此句は芭蕉の詠んだ名句であるが、解釋の仕方によれば高木は風に折られ、出る抗は打たれるこ云ふのこ同じ意味にこるこゝが出來る木槿も道端に無かつたなれば馬に喰はれはすまい。

六月二十七日

■己を尊ぶものは萬人亦之を尊ぶ……（スマイルス）

己れを尊ぶ、所謂唯我獨尊だが、己れを尊ぶに就ては尊ぶたけの要素が無くてはならない、品性も人格も無い癖に獨りよがりに自重して居つては人は尊ぶこ

ころか狂人扱にして仕舞ふだらふ。

六月二十八日

■人生意氣に感ず、功名誰れか論ぜん……（魏　徹）

人は感情の動物である、だから人の意氣に感じて事を爲すものは決して慾德を論するものでは無く、一意其人の爲めに盡すものである、だから人を使はふこするものは啻に金錢を以てせず、意氣を以て使ふやうにせねばならぬ。

六月二十九日

■人事をつくして天命を俟つ……（バーンス）

是れが當然である、然るに世には何が事業を企てゝ中途で蹉躓をすると「是れは俺れの運が惡いからだ、仕方が無い」と意氣が挫けて仕舞ふものがあれば、又重き病氣に罹つても醫者の診察もうけず「人間の壽命に定まりがあるから癒くなるものなれば別に醫師の厄介にならずとも癒くなるが壽命の無いものなれ

ば何んな名醫に診てもらつた處で癒るものか」と澄して居るものもある、是れ等は所謂人事を盡さぬもので大變な心得違ひと云はねばならぬ。

六月三十日

■其源を塞ぐものは渴き、其本に背くものは枯る……（淮南子）

月末の支拂ひに苦しむものは常々から其心掛が無いからだ、所謂其源を塞ぎ其本に背いて自分の稼業に精を出さぬからである、仮令精を出した處で冗費の爲めに月末の瀬戸まであるべき金を中途で遮つて仕舞ふからである。

七月一日

■原泉滾々として晝夜を舍てず、科に盈ちて後に進み、四海に於る、本あるもの是の如し……

●舍は捨てず、科は凹地、●盈は滿つる、放は至るの意義である。

さて此の語の意味は流れて絶えぬ源泉があるから途中の凹地も潤ひ、末に續く

ことが出來るが、素養の無いものは何れほど威張つたところで所謂源泉の無い流れ同樣である、腹案の無いものが何んな大風呂敷を披げたところで是れも中途で絶句をして恥を搔ねばならないと云ふ戒めである。

七月　二日

■德孤ならず必ず隣あり……（論　語）

德は必ず孤立するものでは無い、德を行ふほゞの人なれば必ず仁があり、仁があれば信も是れに從ふものであると云ふ解釋と、德を行ふ者は世間から捨てられて孤立するものでは無い、必らず世の同情を得て益々榮ゆるものであると解釋を下すものと二つあるが、先づ前者の方が穩當であると思ふ。

七月　三日

■人皆我が飢を知りて人の飢を知らず、故に人を憐むの心なし、我が飢を知らば何んぞ人を憐れまざらん、放逸の人はたゞ我れを知りて人を知らず……（澤庵彈師）

我が身抓んで人の痛さを知れと云ふのと意味に於ては變りは無い、自分の身を抓つて痛さの知つて居るものは人の痛さにも同情をするが、自分の身を抓らぬものは人が抓られて何れほど痛いのやら搔いのやら判るものでは無い。

七月　四日

■一寸の嘘は五尺の身体を縮む……（古　諺）

嘘と云ふことは何んでも無いことでも愼しまねば次第に大きくなつて遂には自分の身の置き處の無いやうなことになる、或る武士が最初何んでも無い嘘を云ふたのを追窮されて今更ら嘘だとも云ひかねる處から更らに大きな嘘をつくとそれを又もや追窮されて愈よ大きな嘘をつき、遂には言ひ譯の仕方が無くなつて切腹をしたと云ふ昔話を聞いたことがある。

七月　五日

■長く見ざれ、短く聞かざれ、怨は怨を以て消すべからず、怨は怨ざるを以て消ゆるものなり……（釋　迦）

長く見ざれこは執念深く何時までも見て居るなこ云ふこと、短く聞ざれこは氣が短くては不可無いこ云ふこと、怨に報ゆるに怨を以てすれば俗に云ふ血で血を洗ふやうな譯で益々宜しく無いが、先方から怨んでも此方から德をもつて交際て居れば先方の怨も何日が消にて仕舞ふものである。

七月　六日

■紳士には一の諷刺にて足れり、然れども野人は之を鞭韃せざれば悟らず……（バ　ス）

人見て法說けこ云ふ俗諺こ同じ意味である、犬の吠にるのを止めやうこするに叱るよりも食物を與にるに限る。

七月　七日

■天の星を數へるな……（西　諺）

大空にある星の數を人間の眼光を以て數へた處で數へ盡せるもので無いから云ふまでも無く馬鹿な業である、處が世の中には此の星を數へるやうに、自分の技量で出來得ないこをしやうこ無駄骨を折るものは隨分こ尠くないやうだが是れは愼しまなければならない。

七月　八日

■嘉肴ありこ雖も食はざれば其旨きを知らず、至道ありこ雖ち學ばざれは其善さを知らず……（禮　記）

嘉肴は珍味な御馳走、至道は人間の修むべき道である、是れこ同じここで世に餘財を持つて居つて使ふべき道を知らず、花柳の巷へ無暗こ捨てに行くものがある。

七月　九日

■錦を衣て絅を尙ふ……（中庸）

絅こは薄衣のことである、錦を衣て絅を尙ふこ云ふのは、人格もあり修養もあり徳もある人が殊更ら謙遜して人後に附いて居ることを云ふので、知りもせぬことを知つたかぶりに人前で云ふたり、素養も無いのに高慢チキなことを云ふものは絅を衣て錦を飾ることでも云はねばならぬ、尤もそんなものゝ錦は塗物であるから雨にでも逢へば或ひは流れて仕舞ふかも知れない。

七月十日

■兵は拙にして速こを聞く、未だ巧みの久しきを聞かず（孫子）

是れは獨り兵法だけに應用すべきでは無い、商事にしろ其他凡てのことに用ひることが出來る、此の語の意味は戰に望んでは作戰計畫は假令不味くこも速かにやるべし、遲くては如何に巧みでも旨く勝てるものでは無い、つゞまり敵の機を制しよこ云ふのである。

七月十一日

■麒麟の衰ふるや駑馬是れに先つ……（戰國策）

俗に麒麟も老ゆれば駑馬に劣ろこ云ふのこ同じ意味である、麒麟は獸類の王こまで稱へられて居るものだが、それでも年が老ろこ馬も馬、駑馬にすら後れるやうになる、人間だつて若い頃には立派だつても老年になつては根氣も力も拔けて仕舞つては血氣盛んな若者に勝つことは出來無い。

七月十二日

■遠きを知りて近きを知らず……（淮南子）

碁に岡目八目こ云ふことがある、自分が盤に向へば石の勝敗は一寸判りかねるが、人の對石して居るのを側から見て居るこよく判る、是れが遠きを知つて近きを知らざるの判り易い一例である、碁だけでは無い、人生の起居に人のことを笑つて居つて自分の身を笑はれて居るのを知らんものが尠く無い、注意すべ

しである。

七月十三日

▣毛を以て馬を相す……（史　記）

毛並が立派だからと云ふて走ることが出來ねば馬としての價値は無い、人間では彼の人は辨口が旨いから、彼の人は風采がよいからと買ひ被つてはトンデも無い喰せものゝ引ッかゝる恐れがある。

七月十四日

▣管を以て天を闚ふ……（莊　子）

針の空から天覗くと云ふ俗諺と同じことで、管や針の穴から覗いたくらいでは到底天の宏大なことが判ら無いとの意味であるが、天だけぢや無い、世間のことも小い眼を以て觀察しては實際のことが判るものでは無い。

七月十五日

▣羊をして狼に將たらしむ……（漢　書）

此の例も世間には隨分とある、早い話が大株主とか其他何かの緣故によつて是れまで會社の營業に何等關係をしたことの無いものが會社の專務取締になつたり或ひは重要な椅子を占めて、譯も判らずに盲判ばかり押しておる人がある、羊を狼に將だらしむとは取りも直さず夫れだ、だが此んなのなれば其部下になつた人間も自分の身が可愛から蔭では舌を出して笑ひながら其面前では畏まつて居るだらふが、夫れでも充分の差圖が行はれるものでは無い、惡くすると嚙み殺されぬまでも頭から馬鹿にされて仕舞ふくらいのことは免かれぬ。

七月十六日

▣大聲は里耳に入らず……（莊　子）

此の語は音樂のことを云ふたもので、立派な調和した樂は普通一般の人の耳には判らぬ、夫れよりも流行唄か何んかの方が悅んで迎へると云ふ意味だが、是

れを高尚な爲めになることは世間の人は耳を傾け無い、夫れよりも卑俗なこと
の方が悦ぶと云ふやうに解釋しておる人もある、が夫れは何方でもよい要する
に此の語の意味も人見て法說けと云ふやうなことになる。

七月十七日

▣桃李言はざれども自ら蹊をなす……（史　記）

支那では我國で梅や櫻の花を愛でるやうに桃や李の花を愛でる處から桃李と云
ふたのだらふが、此語が我國だつたなれば梅櫻とか、櫻楓とか云ふたに違ひは
無い、それは兎も角、此の語は野や山の中に綺麗な花が咲いて居ると、花自身
は別に其事を知らす譯では無いけれども是れを見に來る人が後へ〳〵と續いて
道の無かつた處へ何日の間にか小路の出來るのと同じく、德の高い人は何處に
居して居つても何日の間にか聞き傳へ人は遙々と教へを受けにくるものである

七月十八日

▣大行は細謹を顧みず……（史　記）

一に大功は細瑾を顧みずとも書く、訓音も同一なれば字義は兎も角、意義に於
ては變りは無いから差支へはないやうなものゝ是れは樊噲の云ふた言葉で、史
記の項羽本記に行と謹を使つて居るから矢ッ張り其方に據ることゝした。
語は大事を行はんとするものは少しの謹みなぞは顧みては居られないと云ふので
此次ぎに「大禮は小禮を辭せず、」即ち大禮を行ふ時は小しくらいの禮儀は欽け
ても先づ大禮を滯り無く遂げるやうにすれば夫でよいと記してあるが、是れ
は樊噲のやうな豪傑だから夫れで通用したかも知れない、けれども大事の前の
小事と云ふこともある、また世には大行よりも細謹を顧みぬことを主眼として
居る人もあるやうだからマア〳〵細謹も顧み、小讓も辭して何事も愼しむやう
にして居る方が間違ひはあるまい。

七月十九日

▣千人の諾々は一士の諤々に過ぎず……（史　記）

諾々は何事も御無理御道理にハイ〳〵と受け答へをすること、諤々は所謂直言で憚り無く云ふことで、千人の家來が御無理御道理で主君の云ふ通り只だハイ〳〵と受け答へをして居るよりも只だ一人のものが直言を以て憚り無く可否を言上に及ぶ方が遙かに勝つて居ると云ふ意味、此の語は趙良が秦の宰相商君の前へ出た時に云ふたものである。

七月二十日

▣猛虎は尺草に伏して藏ると雖も身を蔽ひ難し……（唐　詩）

桃李の語には德ある人を桃李に譬へたが、此語では猛虎を英雄に譬へた、猛虎は尺に餘る草の中に伏して潛んで居つても判るやうに英雄は何地に隱れて居つても知れると云ふのである。

七月二十一日

▣咆哮する者必ずしも勇ならず……（抱朴子）

世には空元氣と云ふことがある、然も實力の無いものほど空元氣を出したがるものだ、人を恐れる犬ほど人に吠えたがるものだ、人間でも氣の小さいものが夜中淋しい土地を通るのに殊更ら大きな聲で吟聲をやつたり、心中でビク〳〵しながらグツと両擘を張つて逃げ腰で活歩して行く、此んなものは横合から不意に「おいッ」とでも聲を掛けられたなれば最後之助、吃驚して腰を抜かすか、惡くすれば目を廻さぬとも限らん。

七月二十二日

▣狗猛々して酒酸し……（晏子春秋）

或酒屋があつた、綺麗な器を調へ、立派な看板を表に掲げてあるから誰れでも買ひに行きそうな筈を少しも賣れない、其内に仕込んであつた酒が腐敗に傾いて酸くなつたから其家の主人も不思議に思ふて或日土地の人に「貴郎方等は御

酒をお好きのやうにお見受けするが何故手前の方へ買ひに來てくれません、手前の方は酒も充分に吟味をして居れば値段も外方より勉強して居る筈ですが」と聞くと相手の男は「そりや判つて居る、それで俺れ等は買ひに行きたいのは腹一抔だか、お前の方へ買ひに行くと門口に犬が居つて嚙みつくから何うも行くことが出來無い」と云ふたのが此の語源であるが是れは酒屋だけでは無い、一國の内にも一家の内にも頭の黑い猛犬が居つて客に嚙み付く爲めに經濟界の不振を來したり、繁昌すべき筈の店を衰微さす例が隨分あるから氣を付けねばならない。

七月二十三日

■驟雨は日を終へず……（老　子）

驟雨は遽か雨、俗に云ふ夕立のことだ、夕立は激しく降るものだが、一日は愚か半日も降り續くことは滅多に無い、人間も夫れと同じことで勢ひの凄ましいものほど其勢ひが長續きのした例の無いのは楚の項羽、我國では旭將軍ごまで云はれた木曾義仲を見ても判る。

七月二十四日

■耳を掩ふて鈴を盜む……（古　諺）

盜むと云ふことは他人に氣取られぬやうにせねばならぬことである、處が鈴を盜むのに自分の耳を掩ふては自分にこそ其音は聞こぬけれども他人にはよく判る、約まる處はホンの自分だけの氣休めに耳を掩ふことになるが此の例も隨分世間にある。

七月二十五日

■天下道有れば走馬を却けて糞車に以てす……（老　子）

天下道あればとは泰平の世のことを云ふたものである、馬も戰國の代には無くてはならぬものだが、泰平の世には千里の駿馬も百姓の車を曳かねばならぬこ